

〒371 前橋市上泉町664-4
前橋市教育委員会管理部文化財保護室
TEL 0272-31-9531

富田遺跡群

土地改良事業実施地区内ならびに
新農業構造改善事業実施地区内
埋蔵文化財発掘調査概報

昭和55年度

前橋市教育委員会

目 次

I	概 説	1
1	はじめに	1
2	層 位	2
3	調査区の環境	2
II	発掘調査の概要	3
1	住 居 跡	3
(1)	弥生土器伴出の住居跡	3
(2)	古墳・奈良平安時代	9
(3)	ま と め	32
2	寺院跡・居館跡・その他	34
(1)	寺 院 跡	34
(2)	配石遺構	35
(3)	環濠跡・その他	36
3	ま と め	37
III	む す び	37

序

近年、農業の近代化がすすむにつれ、農地の効率的利用を目的とした土地改良事業がさかんであります。これら事業と埋蔵文化財保存の問題は常にうらはらの関係にあり、当教育委員会にあっても、文化財保護という立場から、両者の調整に努力しているところであります。

ここに報告する富田遺跡群もその一つで、道水路部分及びやむを得ず削平する部分について、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、弥生時代～平安時代の各時期にわたる竪穴住居、中・近世の居館跡、寺院跡等この地域の歴史を解明する上で貴重な資料が数多く発見されました。ここにその結果の一端を報告いたします。

この調査を実施するにあたり、終始御協力いただいた農政部土地改良課、農政課及び富田南部土地改良区の方々、また、直接調査に携わっていただいた作業員の方々に対して厚くお礼申し上げます。

昭和56年3月31日

前橋市教育委員会

教育長 金井博之

例　　言

1. 本報告書は、前橋市土地改良事業実施地区（富田南部）内および、新農業構造改善事業実施地区内の埋蔵文化財発掘調査についての概報である。
2. 調査主体は、前橋市教育委員会、前橋市土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査団である。
3. 調査担当者および調査期間等。

所 在 地 前橋市富田町宮下744-1他11筆。

調査期間 昭和55年7月10日～昭和55年10月4日。

担 当 者 井野誠一

調査員 入内島裕美

調査面積 10,000m²

4. 本書の執筆は、担当者、調査員が分担し、遺物整理・図面整理・図版作製・遺物写真等は、調査担当者、調査員および、飛田野正佳、柴崎まさ子、洞口恵美子、安藤友美が分担した。
5. 発掘調査にあたっては、担当課、地元関係者の他に下記の事業員の方々の協力があった。

星野辰男、天沼ゆり子、天沼福太郎、吉田節子、小林初子、吉田成人、吉田寿代、星野さと子、小屋政雄、根岸いく、入沢やい、久保千代子、内藤貴美子、天沼キヨノ、吉田美智子、赤石和美、吉田洋子、内田正敏、井上春男、井上その、塩沢登喜雄、大沢峰雄、大沢憲一、井上よし子、大沢くに子、大沢伊三光、橋本照代、松村のり江、柿沼保子、大沢利郎、橋本タキ、細谷重子、吉田みや、井野修二、大沢あき代、工藤勝枝、鈴木民江（順不同）

I 概 説



図版1 遺 跡 地 全 景 (写真上部は南、55.9.2撮影)

1 はじめに

昭和55年度の富田遺跡群の調査区は、富田町の荒砥川右岸の段丘の南端近くにあり、人家、道、田等にはさまれたほぼ平坦な地区である。調査以前は、ほとんどが桑園であり、一部畑になっていた。開墾前は一面の雑木林であったという。

今年度は、調査の第2年次にあたり、調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡3戸を含む竪穴住居跡70戸、寺院跡、環濠跡等を検出した。

竪穴住居跡は、覆上がり薄かったのにもかかわらず、保存状態の良いもの多かった。遺物は多様で、電にかけられたままの長甕や、甕・壺・子持勾玉など、特に古墳時代の住居跡で、遺物が豊富であった。

調査区は、明治六年と江戸末期の地籍図等によれば、正法院の所在地と記されている。この正法院は、現在約400m北に所在しているが、当初は今回の調査区内にあったもので、火災により焼失、移転をしたとの伝承があり、今回の調査で、その位置、規模が確認された。

環濠跡は、二重の濠をもつが、部分的な検出のため、範囲は推定するにとどまった。

富田遺跡群における、昭和54年度の中世古墓群・古墳等の調査に続き、55年度の弥生時代を含む竪穴住居群・寺院跡等の確認等貴重な資料を得ることができた。

なお、調査にあたっては、表土の除去はバックフォーを使用した。

2 痘位

竪穴住居跡が掘りこまれているローム層の直上
は耕作土で覆われていた。

軽石層では、C 軽石が純層として、弥生時代の住居跡にレンズ状に堆積をしている。ニッ岳系軽石（6世紀）、B 軽石（1108）は、純層では検出されなかった。

C 軽石は、降下時には、現在の厚さの2倍近くであろうと推定される。(群馬大・新井教授)

地層表

I	黒色土 ニッカ系軽石含む	20cm
II	茶褐色土	20cm
III	黒褐色土 C軽石の2次堆積含む	20cm
IV	黒褐色土 C軽石少しまじる	5~10cm
V	C 軽石	10~20cm

50号住居跡による

3 調査区の環境

江戸末期と推定される地籍図（36頁挿図32参照《部分》）を、現在の地図に重ねると、寺を中心として寺の所有地が広がり、南は「女堀」に達している。54年度調査の中世古墓群は、当時の正法院の所有地内にあり、その付近にあったと言われる觀音堂は、地籍図で、神口と記されている地点に現在ある。

「？」の付いた名称は図の欠損部にあるため伝承による。神戸の北は、現在正法院があるが、元は、正法院の隣居寺の阿弥陀寺があったところと言われる。

郷藏推定地の三柱神社は、図中の春日社、赤城社と、国外の北の秋葉社を明治初めころ合祀したものと伝えられる。字名「八丁堀」は、元ここに一辻2町の堀（最近までのこる）をめぐらした屋敷跡があったことによる。

郷蔵は昭和の初めのころまで残っており、2間×3間であったと言われる。図北端の東西の道は、産泰道・前橋道。図左の南北の道は、北大太に通ずる。

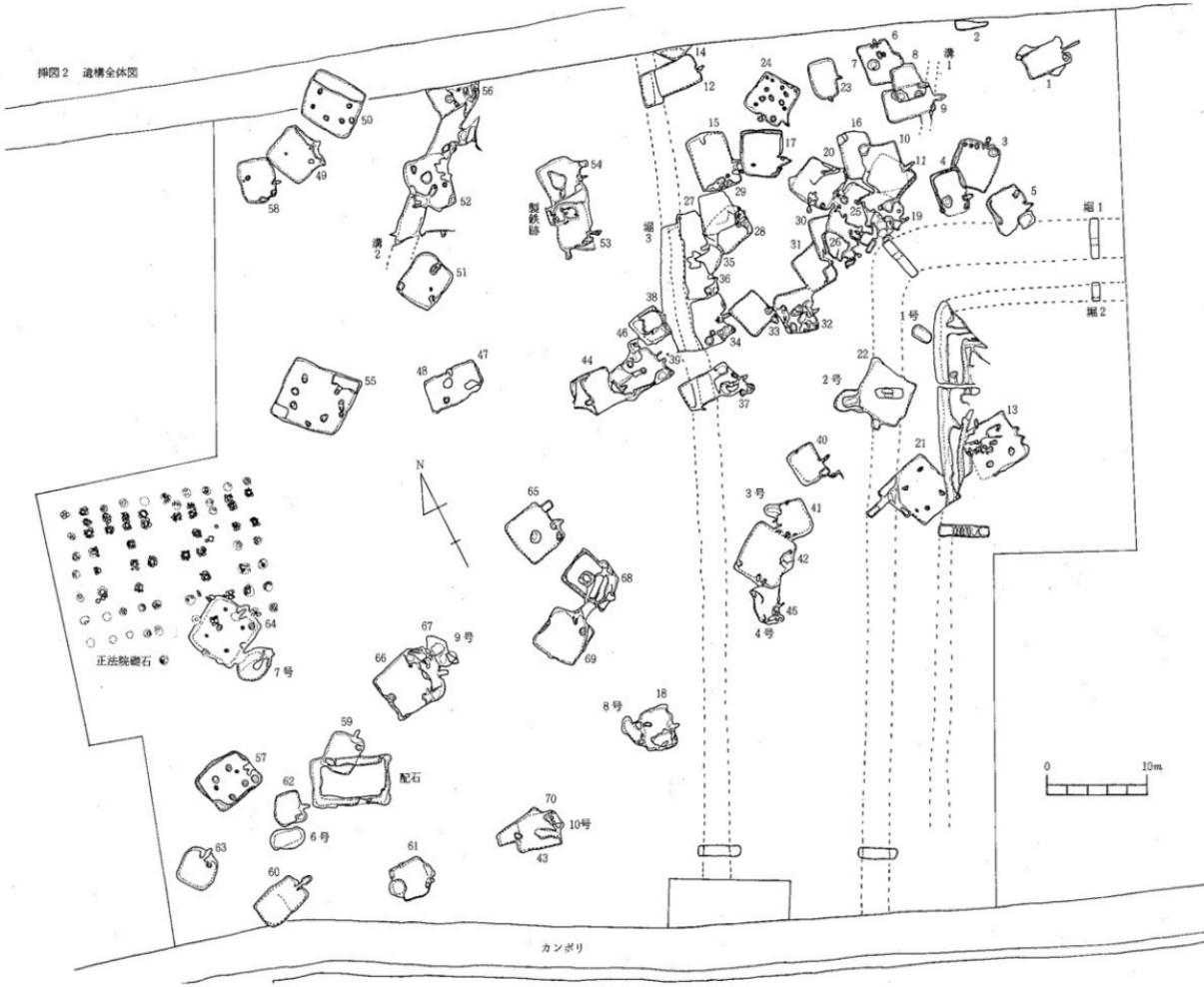
(注) 正は正法院の略

◎は阿弥陀寺の略



挿図1 遺跡地付近の遺跡（正は正法院、阿は阿弥陀寺の所有地を示す）
（大図による推定）

挿図2 造構全休園

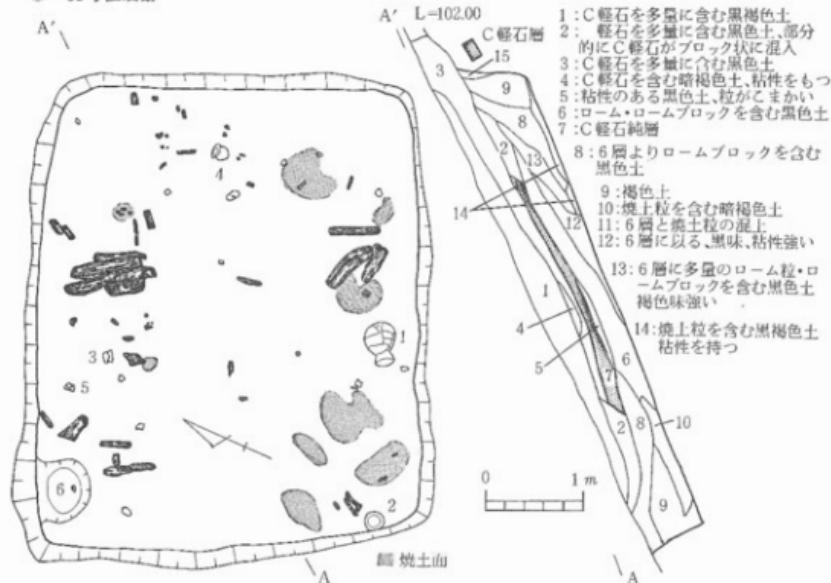


II 発掘調査の概要

1 住居跡

(1) 弥生土器伴出の住居跡

① 51号住居跡



挿図3 51号住居跡

4世紀中ごろ浅間山降下のC軽石層が、地層断面のほぼ中層にレンズ状に堆積していた。C軽石層の厚さは約10cm～20cmである。住居が廃棄され、少し月日が過ぎた頃に、C軽石が降下したことわから。焼失住居跡であり、多量の炭化物が検出された。完形の土器があることから、火災で焼失、廃棄されたと考えることができる。焼土面は多く、かは特定できなかった。柱穴は明らかでない。床、壁ともしっかりしていた。

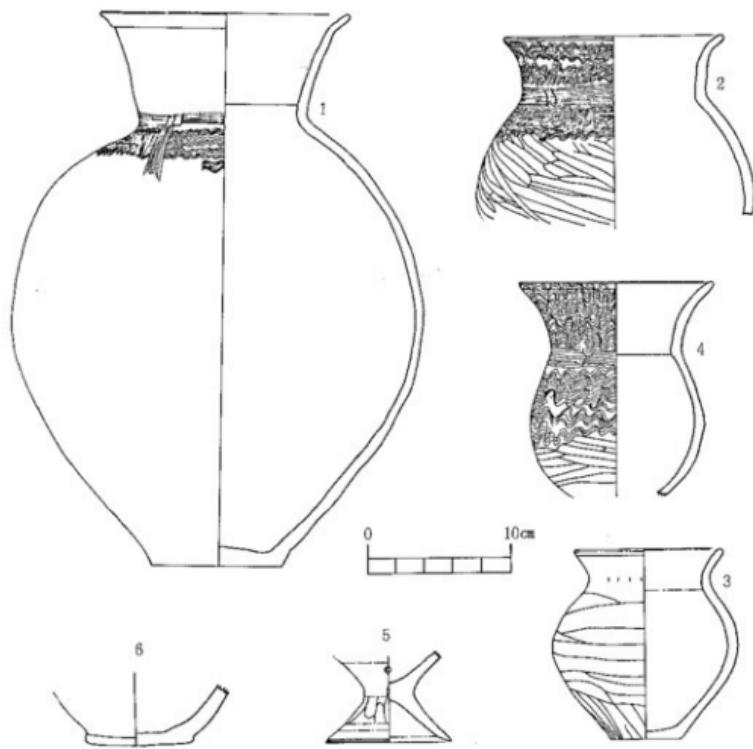
図版2



51号住居跡遺物出土状態



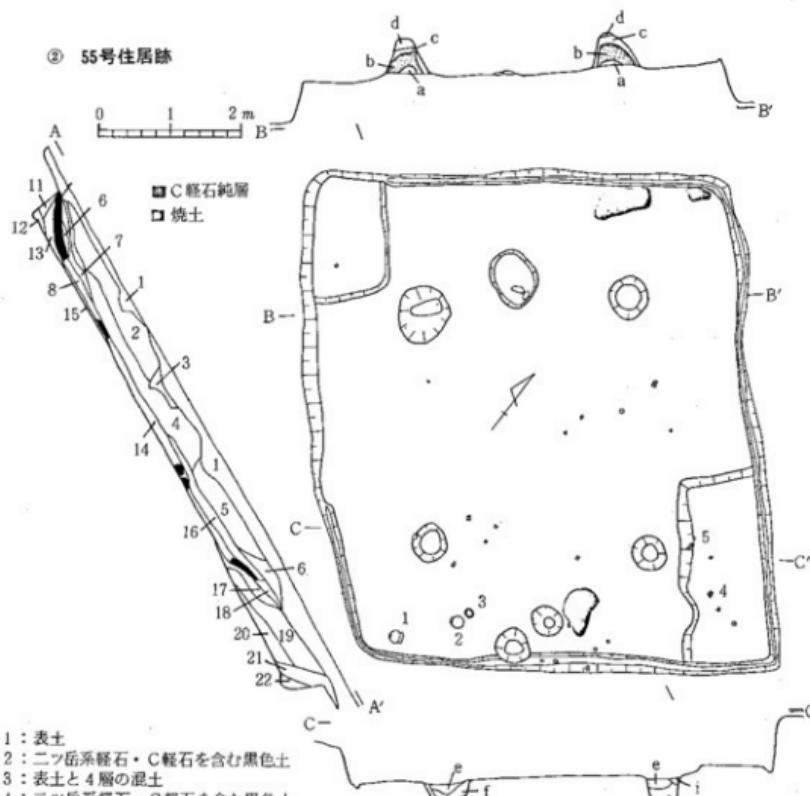
51号住居跡地層断面（白い地層はC軽石層）



插図4 51号住居跡出土遺物実測図

遺物一覧表

遺物番号	図番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	挿図4-3 図版5-4	弥生土器・壺	口径10.2、底径 4.8、高さ13.3、 最大径13.0	口縁部横ナデ。胴部は横方向の細かい研磨。 頭部、底部立ち上りは継ぎ研磨。	砂粒、雲母含有。	焼成良。黒みがかった淡褐色。
2	挿図4-2 図版5-5	弥生土器・壺	口径15.0 最大径19.4	口縁部横ナデ。胴部はハケ目→研磨 →波状文模波11~12本。頭部は3連止彫状文(5ヶ所)右廻り。	砂粒含有。	焼成良。外うすい赤褐色。内赤褐色。
3	挿図4-1 図版5-6	弥生土器・壺	口径17.1 器高38.6 底径8.8 最大径28.7	口縁部横ナデ。折り返し口縁。頭部に継ぎのヘラ削り→櫛書き(9本)→3連止彫状文。右廻り、頭部~胴部に波状文、頭部~胴部に櫛書き(8本)4ヶ所 頭部でいねいなヘラ研磨。	小石粒、砂粒、石英含有。	焼成良。外面うすい赤褐色。内面うすい茶褐色。
4	挿図4-4 図版5-9	弥生土器・壺	口径 (最大径) 13.5 残高 15.0	口縁部横ナデ。体部下半分はヘラ削り。 口縁~体部に波状文。(5本)、頭部には6本 の2連止彫状文。体部下半と内は研磨。	雲母、砂粒、石英を含む。	焼成良。黒褐色、内部はうす茶色。
5	挿図4-5 図版5-7	弥生土器・壺	基部径 8.6	脚部ヘラ研磨。上半分ヘラ削り→ヘラ研磨。 底部ヘラ研磨。脚部・底部ヘラ研磨。	雲母、石英 砂粒含有。	焼成良。オレンジがかった淡褐色。
6	挿図4-6	弥生土器・壺	底径 7.5 残高 4.0	底部・体部共ヘラ削り。	雲母、石英 含有。	焼成良。外淡褐色。内オレンジがかった淡褐色。



- 1 : 表土
 2 : ニッケ系軽石・C軽石を含む黒色土
 3 : 表土と4層の混土
 4 : ニッケ系軽石・C軽石を含む黒色土
 5 : ニッケ系軽石・C軽石を含む黒色土
 6 : ニッケ系軽石・C軽石を含む茶褐色土と黒褐色土の混土
 7 : C軽石を含む茶褐色土と褐色土の混土
 8 : C軽石を含む茶褐色土
 9 : C軽石を多量に含む茶褐色土
 10 : C軽石純層
 11 : サララしている黒褐色土
 12 : 茶褐色土
 13 : 焼土粒・炭化物を含む黒色土と黒褐色土の混土
 14 : C軽石純層を多量に含む茶褐色土と黒色土の混土
 15 : 茶褐色土
 16 : C軽石を多量に含む茶褐色土と黒色土の混土
 17 : 黒褐色土と茶褐色土の混土
 18 : C軽石を含む茶褐色土と黒色土の混土
 19 : ロームブロック少量含む暗褐色土と茶褐色土の混土
 20 : 19層にさきにロームブロックを含む、固く締る
 21 : 茶褐色土、15層に比して柔らかい
 22 : 暗褐色土、柔らかい
- a : C軽石と黒色土との混土
 b : C軽石純層
 c : C軽石とロームとの混土
 d : やや黒味のあるローム
 e : 黑味をもつ褐色土、柔らかい
 f : ローム粒を含む褐色土、柔らかい、C軽石含まず
 g : ローム粒含む褐色土
 h : e層より黒味帯びる
 i : e層より固く締る

挿図5 55号住居跡

図版 3



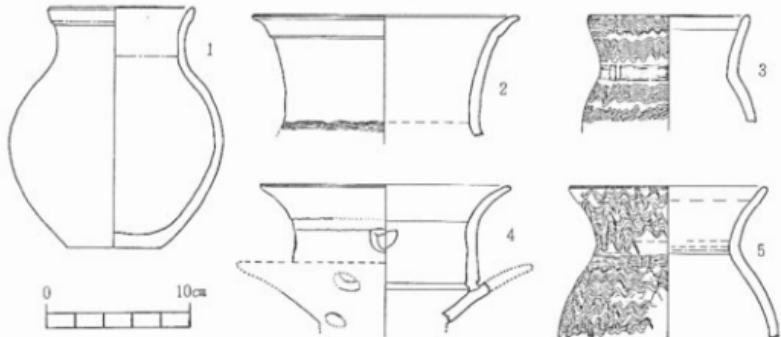
55号住居跡遺構全貌

55号住居跡出土遺物

55号住居跡遺物出土状態

非常に大きな住居である。C軽石が地層断面下層にレンズ状に堆積していた。柱穴は4本確認され、ほぼ正方形の配列を示す。西の2本の柱穴中にはその上部にC軽石の純層が認められ、C軽石降下時には西2本の柱穴部分が空洞化していたことは明らかであり、住居廃棄後2本の柱を抜き取っていったものとも推測される。東西の壁ぎわに焼土が見られるが、炉は特定できない。

床、壁ともしっかりしていた。住居跡内東北及び南西のコーナー部に、約10cmのレベル差のある段差がある。用途は不明だが、住居に付属する施設とみられる。



挿図 6 55号住居跡出土遺物実測図

遺物一覧表

No	遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	挿図6-1 図版3-1	弥生土器 壺	口径 9.9 口径高 16.7 底径 6.5 最大径 14.7	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後内部共にヘラ研磨。	砂粒含有。	焼成良。赤味かかる赤褐色。
2	挿図6-2 図版5-8	弥生土器 壺	口径 8.7 口径高 18.4 底径 12.4	口縁部横ナデ。頸部、内外とも横方向のヘラ研磨。折り返し口縁。頸部に3連止縫状文(櫛歛7~8本)。	雲母・石英を含む。	焼成良。薄めの赤茶色。
3	挿図6-3 図版5-10	弥生土器 壺	口径 11.0 残高 7.4	口縁部横ナデ。頸部に3~4連止縫状文(6ヶ所)の輪書き(10本)がある。その上下に波状文が6~7本。ヘラ削りのあとに模様を入れる。	砂粒含有。	焼成良。うすい褐色でところどころ黒色。
5	挿図6-4 図版5-11 (特殊) 器台形土器	弥生土器 壺	口径 17.0 残高 9.5	口縁部横ナデ。よく研磨されてある。	砂粒含有。	焼成良。淡褐色。
17	挿図6-5 図版5-12	弥生土器 壺	口径 13.5 残高 10.5	口縁部横ナデの上に波状文。3連止縫状文が頸部に施す。	雲母・石英、砂粒を含む。	焼成良。濃いめの茶褐色。

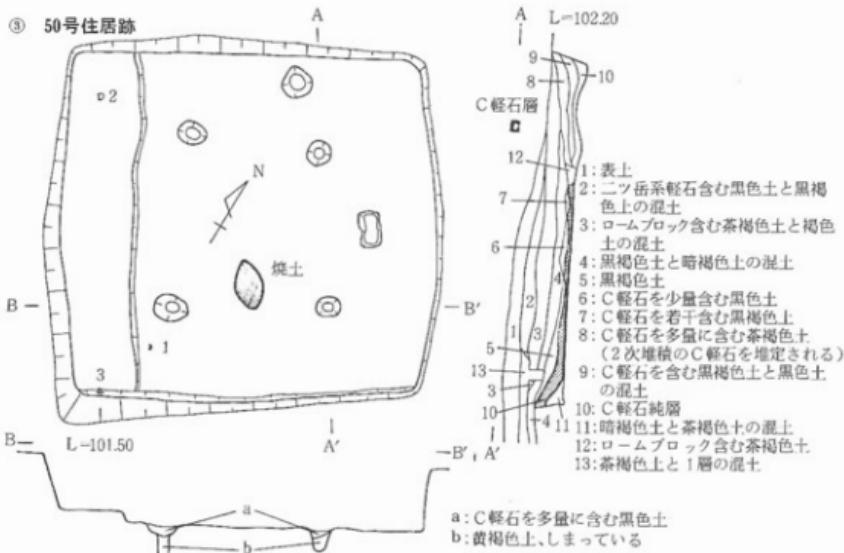


図7 50号住居跡

C軽石層が約10~20cmの厚さでレンズ状に堆積し、住居中央部では住居床面にはば接しており、住居廃棄後間もなくC軽石が降下したことを示している。床、壁ともしっかりしていた。柱穴は4本、長方形の配列を示す。柱穴内にはC軽石は含まれていなかった。炉は、西側の2本の柱穴間の中央に確認された20cm×30cmの焼土面と考えられる。住居の北辺には幅50cm、高さ10cmほどの一段高い施設をしつらえている。

51・55・50号住居跡のC軽石層の堆積状態とを比較すると、51→55→50号住居跡の順で新しくなると考えられる。弥生時代の住居跡で確認できたものは、51・55・50号の3軒であるが、3軒は、西に向って、円を描くように配置しており、さらに、今回の調査区外にも弥生土器の散布がみられ、近くにまだ数軒の住居跡の存在が推測できる。

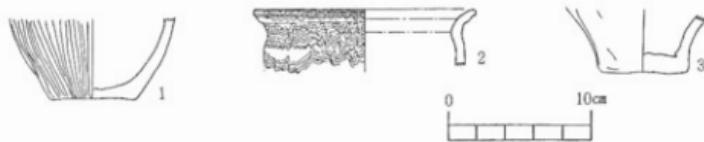
図版4



50号住居跡遺構全景



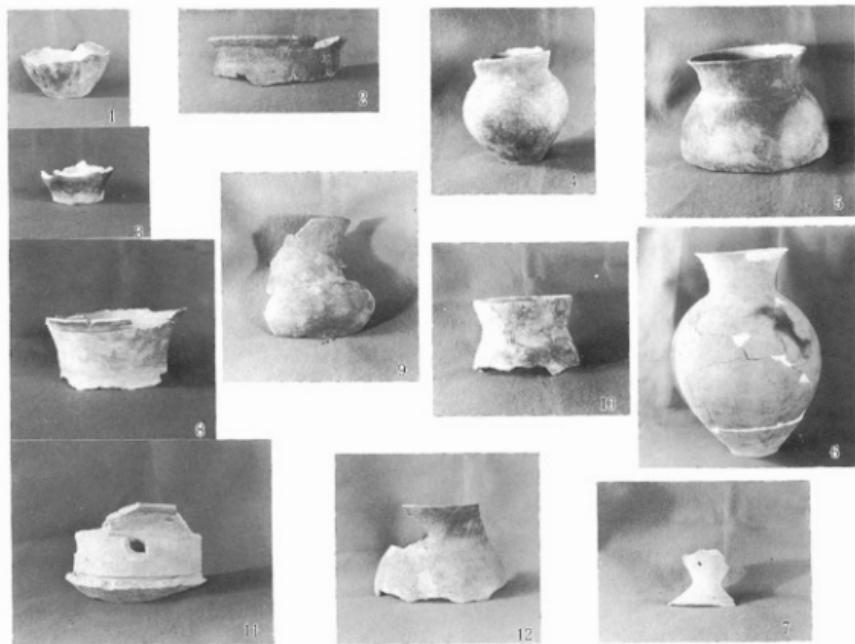
50号住居跡地層断面(白い地層はC軽石層)



插図 8 50号住居跡出土遺物実測図

遺物一覧表

遺物番号	図面番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
2	攝508-1 図 5-1	弥生土器・臺	残高 5.7 底径 5.6	体部には研磨痕がのこる。内側にも削りもしくは研磨がある。	雲母・砂粒 石英・小石 を含む。	うすめのオレンジが かった茶褐色、光沢 のある黒すみ。
4	攝508-2 図 5-2	弥生土器・甌	口徑 15.1 残高 3.8	口縁部横ナデ、波状文は口唇部、口縁部及び胴部(残存部)に施文。柳状工具(6~7本)折り返し口縁。 くびれ少ない。	雲母・石英 小石を若干 含む。	外側黒褐色。内側 赤褐色に黒すみ。
5	攝508-3 図 5-3	弥生土器・壺	底径 6.0 残高 4.4	巻きあげ痕。内側底部未調整。部分的にハケ日が残る。底部より若干上の胴部は指でおさえた痕がある。	雲母・石英 を含む。	うすめ茶褐色少しあ だ色。外に黒すみ。



図版 5 50・51号住居跡出土遺物

(2) 古墳・奈良平安時代
① 24号住居跡

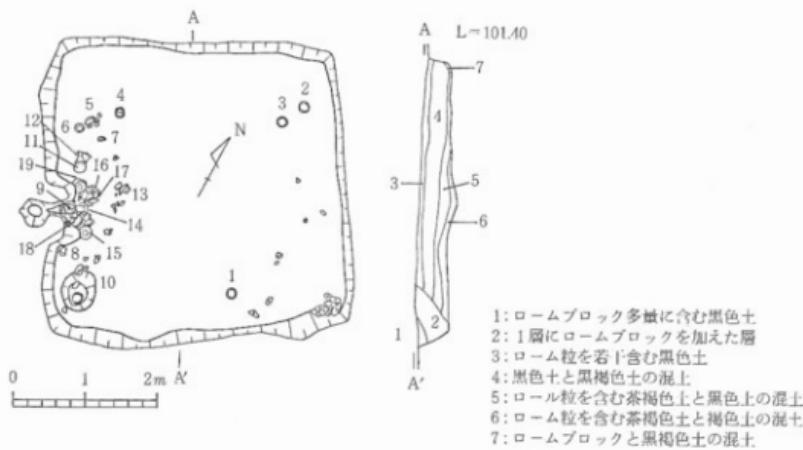


図9 24号住居跡

本住居跡は発掘区中央部よりやや北に位置し、そのプランは西壁が東壁より40cm長い台形を呈する。壁は搅乱をうけている南壁の一部を除いては、ほぼ垂直に掘り込まれている。床面は全体が軟弱で凹凸が目立つ。竈は西壁南寄りに付設され、袖部は芯として、右袖に瓶(No.19)左袖に長甕(No.15)を倒立状態で使用し、これを暗褐色粘質土で固めている。煙道部は住居外へ延び円形を呈する。煙道部、燃焼部ともあまり焼けていない。又、竈内には文石(安山岩)がおかれている。

遺物は竈内及びその付近より完型の壺・瓶・壺・脚付甕等、多量に出土している。特に竈内には長甕が多く、立ったままの状態で埋められているものもある。又No.11・No.12の壺・瓶は組み合わさり、横倒しの状態で出土している。その他南東隅付近には15cm×5cmの棒状石が床面に接して10個出土しており何らかの施設を想定させる。

図版6



24号住居跡遺物出土状態



24号住居跡カマド内遺物出土状態

出土遺物一覧表

No	土器番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	捕図11-1 図版7-1	土師器 ・坏	口 径 11.9 高 4.1	口縁部横ナデ、底部周辺は横方向へラ削り後、中央に一定方向へラ削り、内部ナデ。	石英・雲母含有。	色調は褐色、完形、焼成良好。
2	捕図11-2 図版7-2	土師器 ・坏	口 径 12.0 高 4.3	口縁部横ナデ、底部周辺は横方向へラ削り後、中央に一定方向へラ削り、内部ナデ、口唇部スス付着。	石英含有。	色調は暗褐色、完形、焼成良好。
3	捕図11-3 図版7-3	土師器 ・坏	口 径 12.7 高 4.7	口縁部横ナデ、底部周辺は横方向へラ削り後、中央に一定方向へラ削り、底部上半に指で押した痕跡残る。内部ナデ。	石英・雲母含有。	色調は暗褐色、95%、焼成良好。
4	捕図11-4 図版7-4	土師器 ・坏	口 径 11.5 高 4.9	口縁部横ナデ、底部周辺は横方向へラ削り後、中央に一定方向へラ削り、内部ナデ。	緻密。	色調は明褐色、完形、焼成良好。
5	捕図11-5 図版7-5	土師器 ・坏	口 径 12.5 高 4.4	口縁部丁寧な横ナデ、底部周辺は横方向へラ削り後、中央に一定方向へラ削り、内面ナデ、内外面とも光沢あり。	緻密。	色調は暗褐色、完形、焼成良好。
6	捕図11-6 図版7-7	土師器 ・坏	口 径 12.7 高 4.3	口縁部横ナデ、底部やや雑な不定方向へラ削り、全体的に歪みあり雑な作り。	小砂含有。	色調は暗褐色、完形、焼成良好。
7	捕図11-7 図版7-8	土師器 ・坏	口 径 12.8 高 5.1	口縁部横ナデ、底部周辺は横方向へラ削り後、中央部一定方向へラ削り、内部ナデ。	小砂・小石含有。	色調は内面茶褐色、外面黒褐色、完形、焼成良好。
8	捕図11-8 図版7-6	土師器 ・坏	口 径 12.4 高 4.1	口縁部横ナデ、底部やや雑な不定方向、内部丁寧なナデ、全体的に丁寧な作り。	小砂・石英・雲母含有。	色調は茶褐色、65%、焼成良好。
9	捕図11-9 図版7-8	土師器 ・坏	口 径 12.4 高 4.4	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、内部は丁寧なナデ。	石英・雲母含有。	色調は黒褐色、95%、焼成良好。
10	捕図11-10 図版7-9	土師器 ・坏	口 径 13.2 高 4.7	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、内部ナデ、内面の器肌荒れる。	石英・雲母含有。	色調は茶褐色、完形、焼成やや不良。
11	捕図10-1 図版7-11	土師器 ・壺	口 径 13.6 底 径 7.0 高 5.1	口縁部横ナデ、胴部斜方向へラ削りへ。全体的にわざかに歪んでいる。	砂粒含有。	色調は茶褐色、完形、焼成良好。
12	捕図10-2 図版7-10	土師器 ・甌	口 径 18.3 底 径 16.8 底孔 径 2.9 高 14.8	口縁部横ナデ、胴部斜方向へラ削りへ。底部の円孔は工具で切りとる。底部に葉模痕残る。全体的に歪んでいる。	小石多量に含有。	色調は淡茶褐色、外面部スス付着、完形、焼成良好。
13	捕図10-3 図版7-12	土師器 脚付甌	口 径 12.8 底 径 11.1 高 16.0	口縁部横ナデ、胴部上半横方向へラ削り、胴部下半縦方向へラ削り。脚部内・外面とも丁寧な横ナデ。	小石・雲母含有。	色調は黒赤褐色、内・外面部ともスス付着、80%、焼成良好。
14	捕図10-4 図版7-14	土師器 ・壺	口 径 22.2	口縁部横ナデ、胴部顯著な縦方向へラ削り、頭部にへラ先で傷つけた痕跡残る。	小石・雲母含有。	色調は茶褐色、65%、焼成良好。
15	捕図10-5 図版7-15	土師器 ・甌	口 径 23.4	口縁部横ナデ、胴部顯著な縦方向へラ削り。	小石・砂粒含有。	色調は淡褐色、70%、焼成良好。
16	捕図10-6 図版7-16	土師器 ・甌	口 径 19.8	口縁部横ナデ、胴部へラ削り、内面に粘土紐まきあげ痕残る。	砂粒・雲母含有。	色調は明赤褐色、50%、焼成良好。
17	捕図10-7 図版7-17	土師器 ・甌	底 径 5.3	胴部へラ削り、外面部の器肌が非常に荒れています。	小石・砂粒・石英・雲母含有。	色調は淡褐色、40%、焼成やや不良。
18	捕図10-8 図版7-16	土師器 ・甌	口 径 19.6 底 径 4.1 高 34.2	口縁部横ナデ、胴部へラ削り、内・外面部も器肌が荒れ、全体的に歪んでいる。	砂粒・雲母多量に含有。	色調は淡茶褐色、90%、焼成やや不良。
19	捕図10-9 図版7-13	土師器 ・甌	口 径 20.9 底 径 9.3 底孔 径 7.5 高 28.1	口縁部横ナデ、胴部縦方向へラ削り、外面部器肌に工具先でおさえた痕跡残る。内面全体にスス付着し黒く光沢帯びる。	小石・雲母含有。	色調は外面淡褐色、内面黒色、完形、焼成良好。

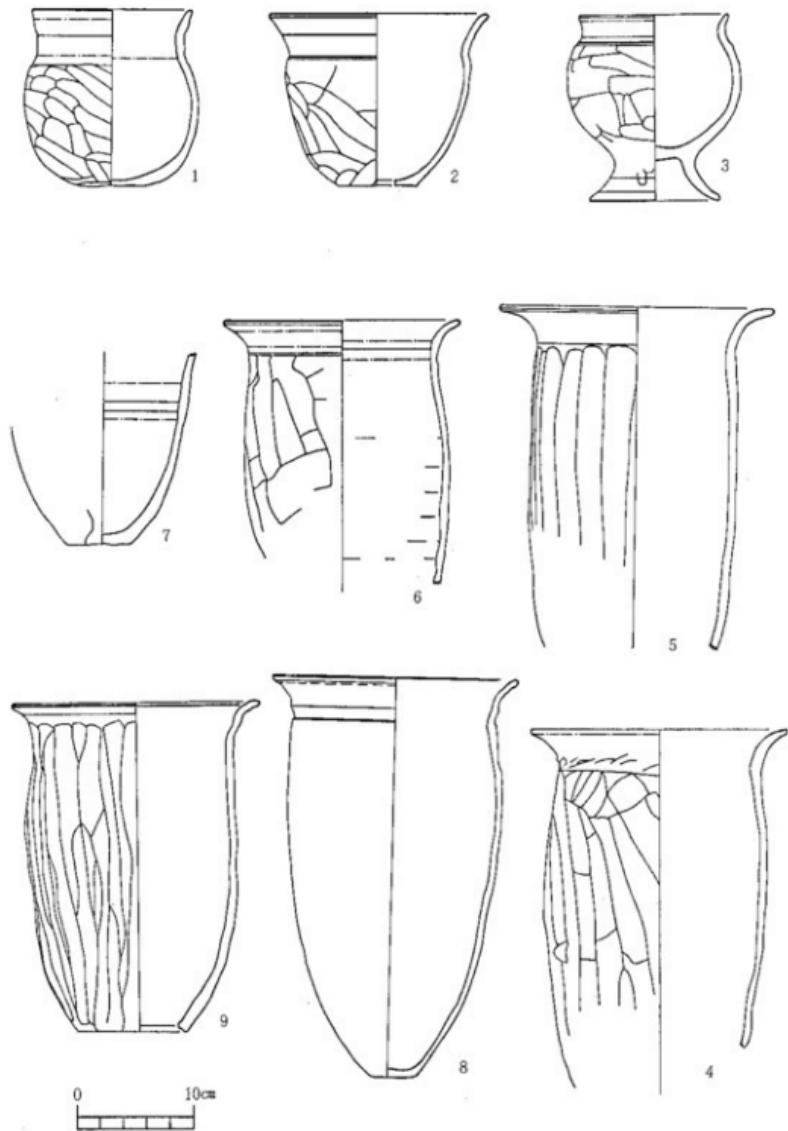


插图10 24号住居跡出土遺物実測図

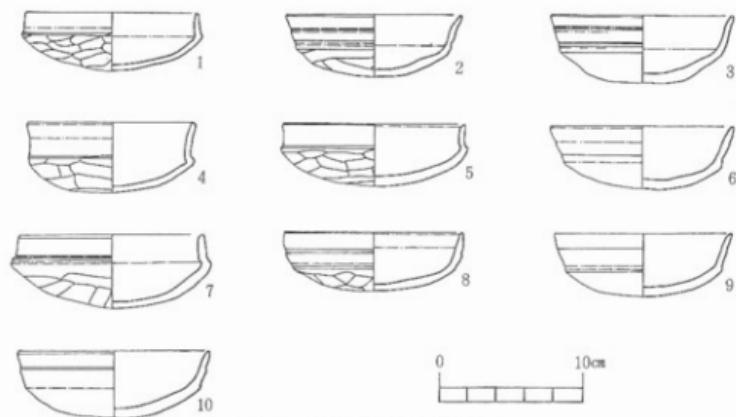


插图11 24号住居跡出土遺物実測図

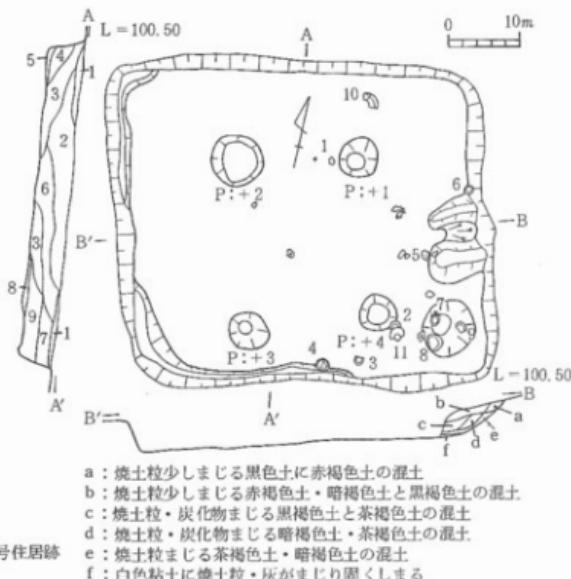


图版7 24号住居跡出土遺物

② 57号住居跡

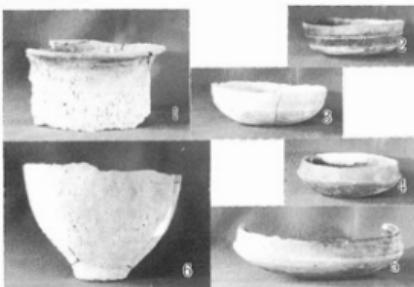
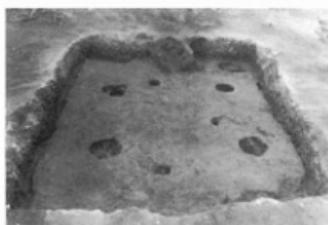
- 1 : 表土
- 2 : ニッケ系軽石・C軽石・ロームブロックまじる黒色土と暗褐色土の混土
- 3 : ニッケ系軽石・C軽石まじる黒色土と黒褐色土の混土
- 4 : 暗褐色土と褐色土の混土
- 5 : ロームブロックと暗褐色土の混土
- 6 : ニッケ系軽石・C軽石まじる暗褐色土と茶褐色土の混土、ロームブロックまじる
- 7 : ニッケ系軽石・C軽石まじる暗褐色土、黒色土と褐色土の混土
- 8 : ロームブロックと暗褐色土の混土、固くしまる
- 9 : ニッケ系軽石・C軽石まじる暗褐色土と黒色土の混土

挿図12 57号住居跡

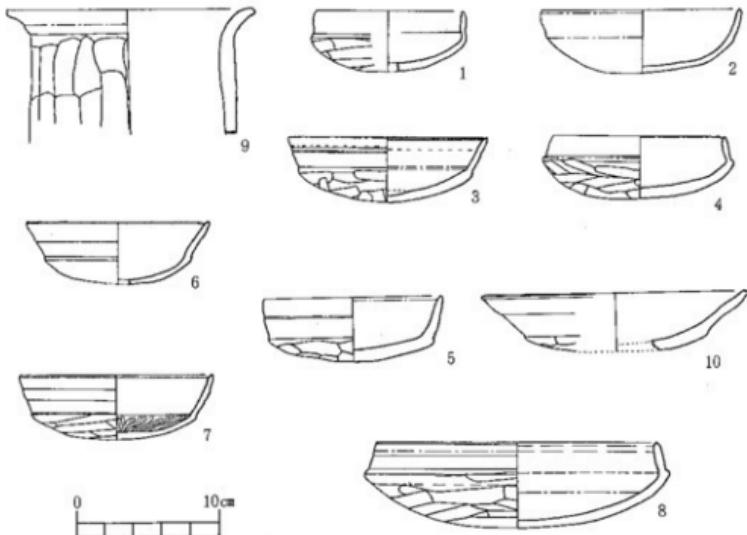


本住居跡は発掘区南西部に位置し、そのプランは東西に長い方形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はロームブロックを混入する暗褐色土の貼床が、住居中央部から南半分にかけては5cm~10cm、北半分では8cm~13cmにみられたが、全体に平坦で踏み固められている。竈は東壁中央部に付設され、袖部、天井部とも白色粘土を使用している。煙道部は住居外に延びず、煙道部・燃焼部ともあまり焼けていない。柱穴は主柱穴と推定されるピット4基を検出し、その距離はP1~P2・P3~P4が185cm、P2~P3・P4~P1は235cmを計測し長方形の配列を示す。柱穴は径20~30cm、円形または梢円形を呈し、床面下25~30cmであった。周溝は西壁及び南壁の一部で確認されており、特に南壁下ですっきりしており、幅10cm床面下6cm~10cmである。

遺物は、竈前・貯蔵穴付近より土師器の壺・壺・壺が出土し、壺に完形品が多かった。又、北壁にNo10の高壺が口縁部を上にした状態で出土している。



図版8 57号住居跡遺構全景及び出土遺物

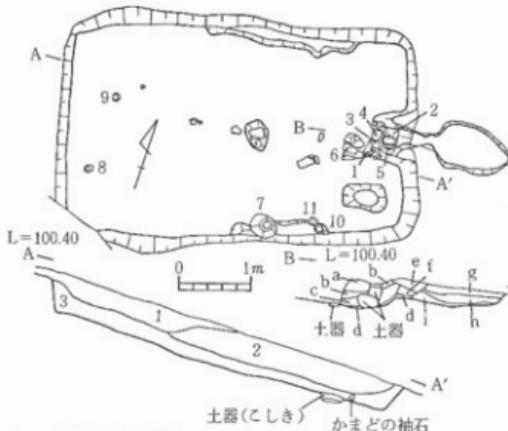


挿図13 57号住居跡出土遺物実測図

出土遺物一覧表

No.	土器番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	挿図13-1 図版8-3	土師器 ・环	口径 10.4 器高 4.5	口縁部横ナデ、底部周辺は横ヘラ削り後、中央に一定方向ヘラ削り、内面ナデ。	雲母含有。	色調は黒褐色、45%、焼成良好。
2	挿図13-2 図版8-3	土師器 ・环	口径 13.9 器高 4.5	口縁部横ナデ、底部は不定方向ヘラ削り、全体的に歪んでいる。	雲母・砂粒含有。	色調は明褐色、完形、焼成良好。
3	挿図13-3 図版8-4	土師器 ・环	口径 3.9 器高 4.6	口縁部横ナデ、底部周辺は横ヘラ削り後、中央に一定方向ヘラ削り。	雲母・砂粒含有。	色調は赤褐色、70%、焼成良好。
4	挿図13-4 図版8-4	土師器 ・环	口径 12.1 器高 4.4	口縁部横ナデ、底部周辺は横ヘラ削り後、中央に一定方向ヘラ削り、全体的に丁寧な作りで光沢あり。	緻密。	色調は黒褐色、完形、焼成良好。
5	挿図13-5 図版8-2	土師器 ・环	口径 12.7	口縁部横ナデ、底部は不定方向ヘラ削り、内部にヘラ状工具先で傷つけた痕跡あり。	砂粒含有。	色調は茶褐色、40%、焼成良好。
6	挿図13-6 図版8-2	土師器 ・环	口径 12.6 器高 4.5	口縁部横ナデ、底部周辺は横ヘラ削り後、中央に一定方向ヘラ削り、内面は横方向ヘラナデ後、底部に放射線状ヘラ研磨。	緻密。	色調は黒味帯びた赤褐色、完形、焼成良好。
7	挿図13-7 図版8-2	土師器 ・环	口径 12.5 器高 4.5	口縁部横ナデ、底部周辺は横ヘラ削り後、中央に一定方向ヘラ削り、内面ナデ。	雲母・砂粒含有。	色調は淡茶褐色、完形、焼成良好。
8	挿図13-8 図版8-5	土師器 ・环	口径 19.6 器高 6.0	口縁部横ナデ、底部周辺は横ヘラ削り後、中央に一定方向ヘラ削り、大型品。	緻密。	色調は淡茶褐色、70%、焼成良好。
9	挿図13-9 図版8-1	土師器 ・甕	口径 17.0	口縁部横ナデ、脇部上半縱方向ヘラ削り↓。全体に器肌が荒れている。	小石・石英含有。	色調は淡褐色、口唇部にスズ付着焼成やや不良。
10	挿図13-10 図版8-1	土師器 ・高环	口径 18.6	内・外面とも横ナデ後ヘラ研磨、内面は斜方向ヘラ研磨著しく、外縁あまり明瞭でない。	雲母・石英若干含有。	色調は淡赤褐色、环部としては完形、焼成良好。

③ 60号住居跡



- 1:二ツ岳系軽石、焼土粒
炭化物含む黒褐色土と暗褐色土の混土
2:1層と表土の混土
3:1層に暗褐色土を含む、ややしまる

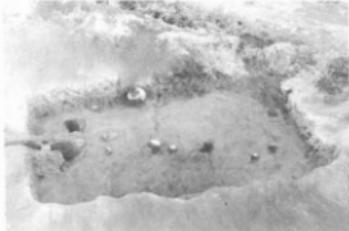
- a: 焼土粒・暗褐色土ブロック含む茶褐色土
- b: 焼上粒・炭化物・ロームブロック
・ローム粒含む暗褐色土
- c: 焼上ブロック・ロームブロック・炭化物含む黒褐色土
- d: 焼土粒含む赤褐色土と褐色土の混上サラサラしている
- e: ロームブロック・焼土ブロック含む褐色土
- f: 焼土粒含む赤褐色土と暗褐色土の混土
- g: 焼土粒含む茶褐色土と暗褐色土の混土
- h: 焼土ブロック・ローム粒含む黒褐色土
- i: 焼土粒含む暗褐色土とローム粒含む褐色土

博図14 60号住居跡

本住居跡は発掘区最南端に位置し、南西隅を“カンボリ”によって切られている。プランは中央部がややはらみ、東西に長い方形を呈する。壁は80%の傾斜で掘り込まれ、床面は平坦で踏み固められている。周溝は北壁・南壁下の中央で検出されているが、床面下3cm～5cmと比較的浅い。竈は東壁中央部に付設され、両袖部には安山岩を用い、竈内にはやはり安山岩の支石がおかされている。煙道部は住居外に延び、楕円形を呈する。煙道部・燃焼部ともあまり焼けていない。

遺物は住居南半分に土師器の壺・甕・壺等及び須恵器高壺が出土している。特に竈内には完形の甕が多く、No.2・5は相互にささえあう状態で、No.4・3・1は重ねられ横倒しの状態で出土している。No.1は横倒しになる際口縁部を右袖石により破損した状況も認められる。又竈前にはNo.9の甕が押しつぶされた状態で出土している。その他No.10の甕は床上10cmの高さで、口縁部を上に向け出土しているが、上半分のみ存在し内部に長さ10cmの川原石2個及び川原砂が混入していた。

図版9



60号住居跡遺物出土状態



60号住居跡カマド内遺物出土状態

出土遺物一覧表

No.	土器番号 図版	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	挿図15-1 図版10-10	土師器 ・壺	口径 17.9	口縁部横ナデ、胸部縱方向へラ削り。	小石・黒雲母含有。	色調は外面茶褐色、内面淡褐色60%、焼成良好。
2	挿図15-2 図版10-11	土師器 ・壺	口径 17.4 底径 7.0 高 34.8	口縁部横ナデ、胸部縱方向へラ削り、底部に不明瞭であるが葉脈模あり、粘土糲巻きあげ痕残る。肩部全体と底部にかけてスス付着。	小石・黒雲母含有。	色調は外面黒褐色、内面茶褐色、完形、焼成良好。
3	挿図15-3 図版	土師器 ・壺	底 径 5.8	口縁部横ナデ、胸部縱方向へラ削り、底部に不明瞭であるが葉脈模あり。	小石・砂粒含有。	色調は赤褐色、底部としては完形、焼成良好。
4	挿図15-4 図版10-1	土師器 ・壺	口径 15.3 底径 5.4 高 18.7	口縁部横ナデ、胸部縱方向へラ削り、内面に1.3~1.5cmの板状工具の痕跡あり、粘土糲まきあげ痕残る。	小石・石英含有。	色調は赤褐色、完形、焼成良好。
5	挿図15-5 図版10-2	土師器 ・壺	口径 16.0 底径 16.1 高 18.7	口縁部横ナデ、胸部縱方向へラ削り、底部に明瞭に葉脈模がみられる。外面全体にスス付着し、器肌が荒れる。	小石・石英・雲母含有	色調は黒赤褐色、完形、焼成やや不良。
6	挿図15-6 図版10-7	土師器 ・甌	口径 21.5 底径 8.3 底孔径 7.9 高 25.8	口縁部横ナデ、胸部縱方向へラ削り、内面及び外面の一部にへラ研磨。又、外面及び内面の上半は赤彩された跡跡か、特に赤帯びた部分がある。全体的に丁寧な作り。	小粒子含有。	色調は赤褐色、完形、焼成良好。
7	挿図15-7 図版10-9	土師器 ・壺	口径 18.1	口縁部横ナデ、頸部横ナデ後明瞭な縦方向へラ研磨、肩部へラ削り後丁寧なへラ研磨。内面は横ナデ後へラ研磨、作りが丁寧でしっかりしている。全体に光沢あり。	小石・石英含有。	色調は淡褐色、50%、焼成良好。
8	挿図15-8 図版10-8	土師器 ・脚部	底 径 10.2	脚部外面は縱方向へラ削り、脚部内面及び外面先端は横ナデ、外面一部にスス付着。	砂粒・石英・雲母含有。	色調は褐色、脚部としては完形、焼成良好。
9	挿図16-9 図版10-4	土師器 ・环	口径 10.8 底径 5.5 高 3.6	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、内面ナデ、底部及び内面の器肌が荒れる。内面はスス付着し黒く光沢帯びる。	小石・砂粒・石英含有。	色調は外面淡褐色、内面黒褐色、完形、焼成良好。
10	挿図16-10 図版10-5	土師器 ・环	口径 13.2 高 4.7	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、内面ナデ、全体的に丁寧な作り。	緻密。	色調は明赤褐色、完形、焼成良好。
11	挿図16-11 図版10-6	土師器 ・环	口径 12.1 高 3.8	口縁部横ナデ、底部周辺は横方向へラ削り後、中央に一定方向へラ削り、内面は丁寧なナデ。	石英・雲母含有。	色調は黒褐色、完形、焼成良好。
12	挿図16-12 図版10-3	須恵器 (有蓋) 高环	口径 11.1 受部径 12.9 基部径 5.3 たちあ がり高 1.4	右回転クロコ整形、环部口縁部及び体部ロクロナデ、环部の底部回転へラ削り後、脚部と接合、接合部は指によるナデを施す。脚部ロクロナデ。胸部は現況で三段透し(上部から一段目三角形、二段目長方形、三段目長方形を呈す)を3方向に持つ。透し部分は鋭利な工具使用の痕跡がみられる。透し相互間に低い凹凸帶みられる。全体的に丁寧な作り。	砂粒含有。	色調は青灰色、70%、焼成良好。

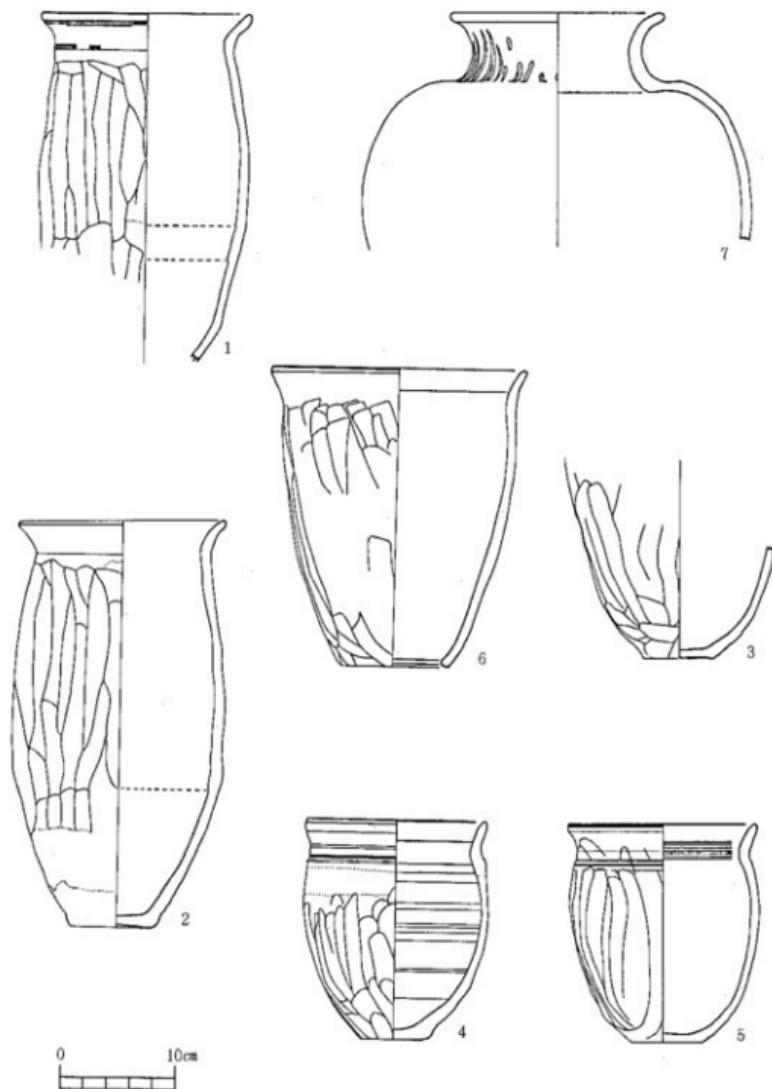


插图15 60号住居跡出土遺物実測図

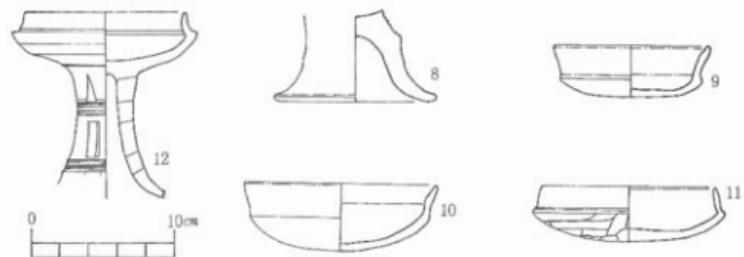
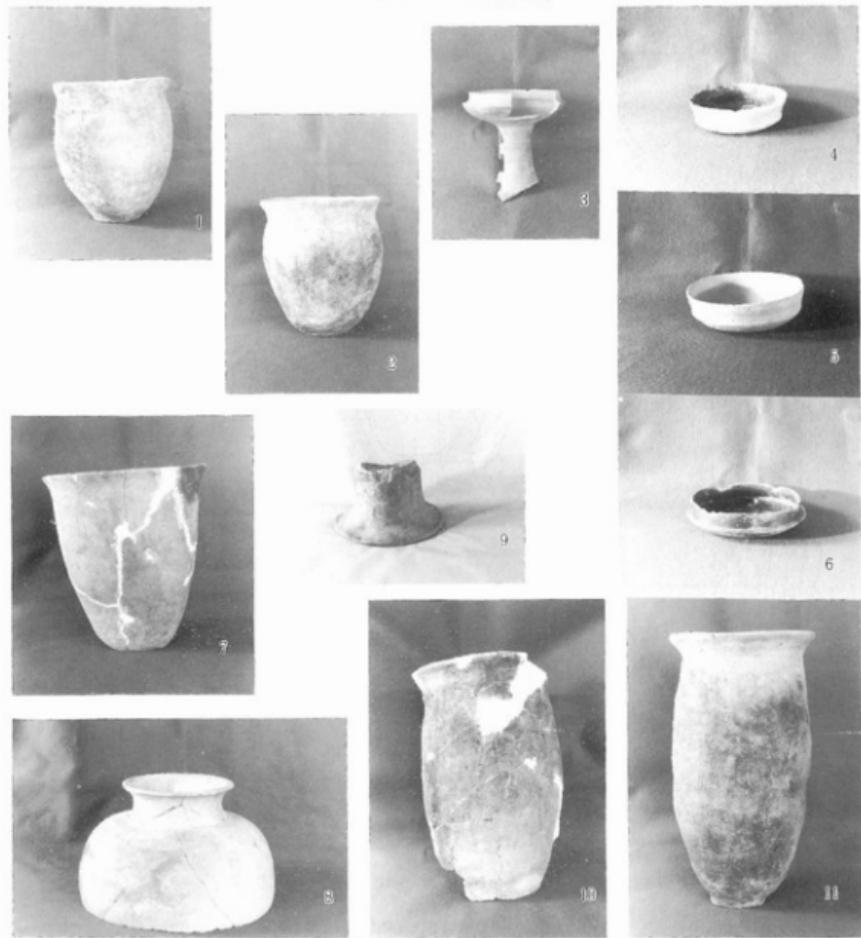
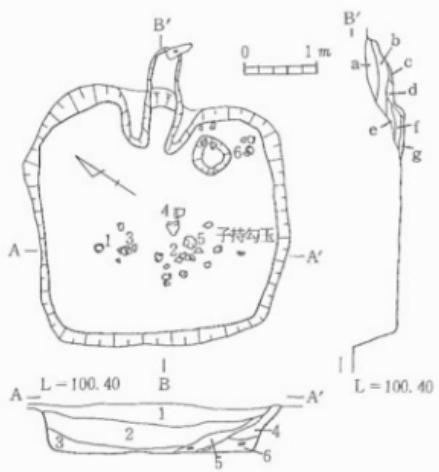


插图16 60号住居跡出土遺物実測図



図版10 60号住居跡出土遺物

④ 63号住居跡



- a : ローム粒・ロームブロック・黒褐色土ブロック含む暗褐色土
- b : ローム粒・焼土ブロック・焼土粒を含む褐色土
- c : 焼土粒含む褐色土・層全体がやや赤味帯びる
- d : 焼土粒・焼土ブロック・灰を含む暗褐色土
- e : 少量の焼土粒を含む茶褐色土と黒色土の混土
- f : 焼土ブロック・白色粘土を多量に含む黒色土
- g : ローム粒・灰・焼土粒主じる茶褐色土

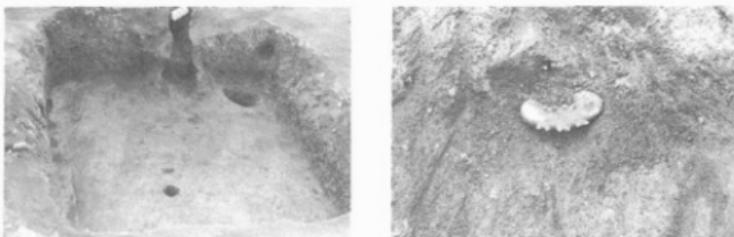
- 1 : ニッケ系輕石・C輕石含む暗褐色土
- 2 : ニッケ系輕石・C輕石含む黒色土と暗褐色土の混土
- 3 : ニッケ系輕石・C輕石・ロームブロック含む茶褐色土
- 4 : 褐色土と暗褐色土の混土
- 5 : ニッケ系輕石・C輕石含む黒色土
- 6 : ローム粒を少量含む暗褐色土

図17 63号住居跡

本住居跡は発掘区南西隅に位置する。プランは中央部がややはらみ、北東隅がやや垂む方形を呈している。壁は約70°の傾斜をもって掘り込まれている。床は全体によく踏み固められており平坦である。竈は東壁南寄りに敷設されており袖部は粘土で構築されている。煙道部は住居外へ延び、先端にはめ込まれるようにして安山岩が出土しているが、表面は焼けておらず、さらに、この部分は耕作により搅乱をうけているため竈に直接関連したものであるかは規定しえなかった。燃焼部・煙道部ともあまり焼けていない。

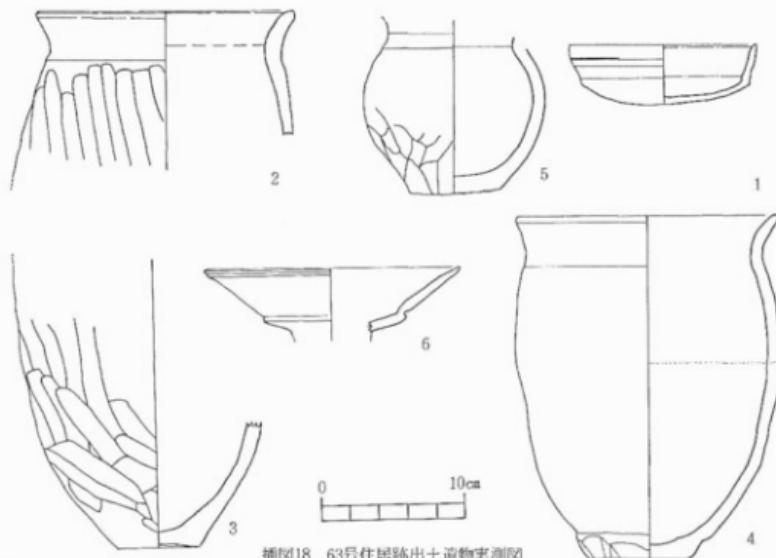
遺物は、住居中央部、貯蔵穴付近に土師器の壺・壺・壺片が出土している。完形品は少なく床面中央部にNo 2・3・4の破片が散在していた。又、南壁下には、床下12cmの高さで、子持勾玉が出土している。頭部を南壁に向け上から滑り落ちた様な状況であった。

図版11



63号住居跡遺構全景

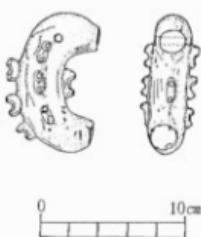
子持勾玉出土状態



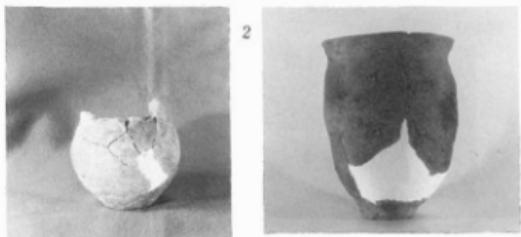
插図18 63号住居跡出土遺物実測図

出土遺物一覧表

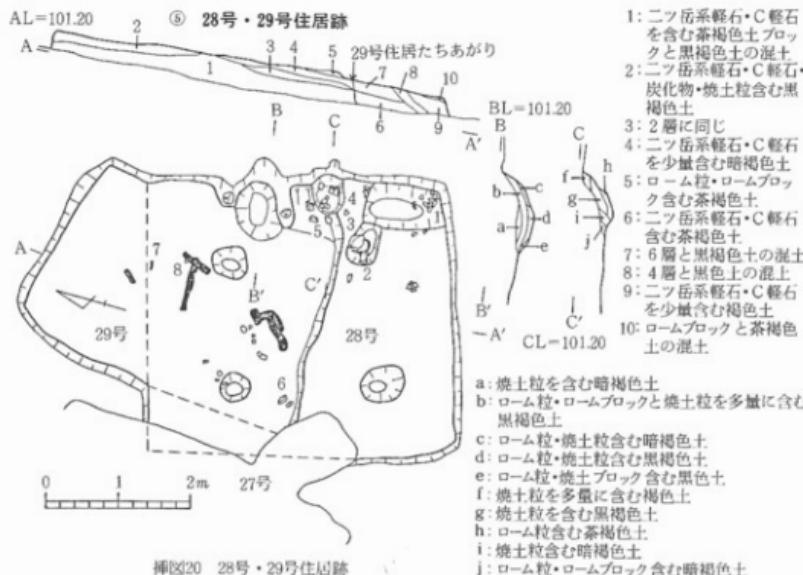
No.	土器番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 上	備 考
1	挿図18-1 図版12-1	土師器・環	口径 12.9 底径 4.1	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、内・外山とも脛肌が残れる。	武骨含有。	色調土淡茶褐色、完形、焼成や不良。
2	挿図18-2 図版12-2	土師器・甕	口径 17.6	口縁部横ナデ、胴部上半綫方向へラ削り、器内厚く、外山残っている。	小石・砂粒・石英多量に含む。	色調土赤茶褐色、スリッジ、焼成良好。
3	挿図18-3 図版12-3	土師器・底盆	5.4	胴部下半綫方向へラ削り、No.2の下半部と思われる。	小石・砂粒・石英多量に含む。	色調土赤茶褐色、スリッジ、焼成良好。
4	挿図18-4 図版12-1	土師器・甕	口径 17.8 底径 6.8 器高 23.8	口縁部横ナデ、胴部難な綫方向へラ削り、全体に難な作りで歪んでいる。	小石・砂粒含有。	色調土淡茶褐色、70%焼成良好。
5	挿図18-5 図版12-2	土師器・底盆	6.3	口縁部横ナデ、胴部へラ削り、内・外山とも脣肌が残れている。	小石・砂粒含有。	色調土赤茶褐色、80%焼成良好。
6	挿図18-6 図版12-3	土師器・高环	口径 17.6	环外部面・中央から放射状削方にヘラナデ、端部は横方向へラナデ。	砂粒・石英含有。	色調土明赤褐色、环部のみ65%、焼成良好。
7	挿図19	子持勾玉	滑石製	暗緑色呈す、9.7 cm×5.0 cmで 190 gあり、表面全体に削った痕跡残る。 径 0.6 cmの孔あり。		



挿図19 63号住居跡出土子持勾玉実測図



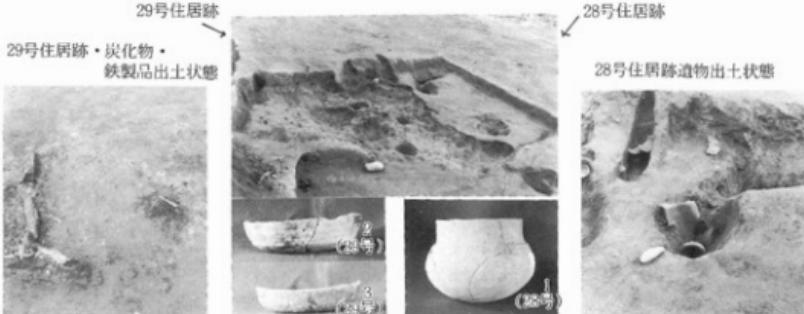
図版12 63号住居跡出土遺物

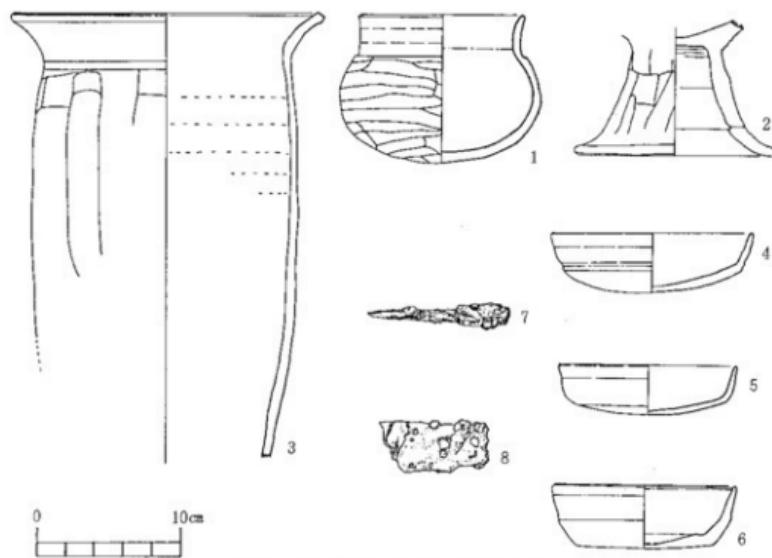


挿図20 28号・29号住居跡

29号住居跡は発掘区中央部やや北寄りに位置し、28号・35号住居跡を切って構築され、西壁を27号住居によって切られている。プランは南北に長い方形を呈し、壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。床面はロームブロックを含む黒褐色土の貼床が、5 cm～15 cmみられ、住居中央部から北半分が薄く、南半分で厚い傾向がある。床全体は踏み固められ平坦である。竪は東壁南寄り、住居外に造り出されており、右袖に砂岩、左袖に安山岩を芯とし、それを暗褐色粘質土で固めている。燃焼部・煙道部ともよく焼けている。なお住居内にみられる柱穴は29号住居より古く28号住居に付設するものと考えられる。出土遺物は少なく、土師器の壺・甕片及び鉄製品であった。又、本住居跡は、焼失住居であったらしく、住居中央部及び南壁付近より、床に接して走向の異なる炭化材が重なった状態で出土している。図示したのは炭化材のみであるが、これを中心に焼土及び炭化物が散在している。

図版13





挿図21 28号・29号住居跡出土遺物実測図

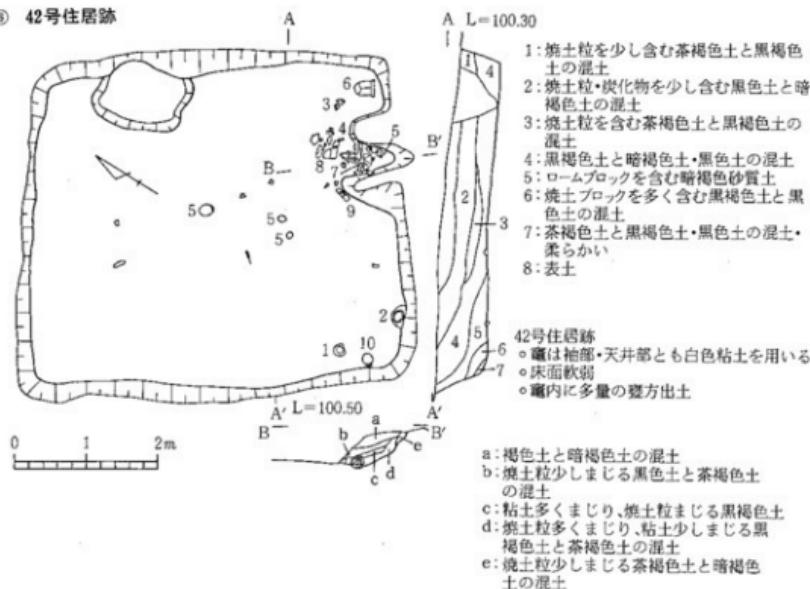
出土遺物一覧表

No.	土器番号 図版番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	挿図21-1 図版13-1	土師器・ 直口壺 (短頸壺)	口 径 11.2 底 径 6.0 器 高 10.4	口縁部横ナデ、体部は顕著な横 方向へラ削り→。底部不定方向 へラ削り。内面ナデ。	若干砂粒含有。	色調は淡赤褐色、 完形、焼成良好。
2	挿図21-2 図版13-2	土師器・ 脚部	底 径 14.1 基部径 6.2	外面は縱方向へラ削り。内面及 び脚部先端横ナデ、内面に粘土 接合痕が残る。	雲母・砂粒含 有。	色調は淡褐色、 脚部としては完形、焼成良 好。
3	挿図21-3 図版13-3	土師器・ 壺	口 径 21.0	口縁部横ナデ、底部は縱方向へ ラ削り。やや器肌が荒れている。	雲母・砂粒含 有。	色調は赤褐色、 60%、焼成普 通。
4	挿図21-4 図版13-4	土師器・ 壺	口 径 14.0 器 高 4.0	口縁部横ナデ、底部不定方向へ ラ削り、内面の器肌が荒れてい る。	砂粒含有。	色調は茶褐色、 完形、内面ス ス付着、焼成良 好。
5	挿図21-5 図版13-5	土師器・ 壺	口 径 12.4 器 高 3.4	口縁部横ナデ、底部不定方向へ ラ削り、内面ナデ。	雲母含有。	色調は淡褐色、 50%、焼成良 好。
6	挿図21-6 図版13-6	土師器・ 壺	口 径 12.5 器 高 4.5	口縁部横ナデ、底部不定方向へ ラ削り、内面ナデ、平底で器肉 が部分によって差(0.3~0.9cm) あり。	砂粒含有。	色調は赤褐色、 65%、焼成良 好。

この他、7(挿図21-7)・8(挿図21-8、刀子?)の鉄製品が出土している。

No.1~4は28号住居跡出土遺物であり、No.5~8が29号住居跡出土遺物である。

⑥ 42号住居跡



出土遺物一覧表

挿図22 42号住居跡

No.	土器番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	挿図23-1 図版15-1	土師器・环	口 径 13.0 器 高 3.9	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、 周縁部横方向へラ削り。	砂粒含有。	色調は明赤褐色。 完形、焼成良好。
2	挿図23-2 図版15-2	土師器・环	口 径 13.4 器 高 4.2	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、 周縁部顯著な横方向へラ削り。	砂粒含有。	色調は明赤褐色。 85%、焼成良好。
3	挿図23-3	土師器・环	口 径 13.7 器 高 4.2	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、 内面部肌が荒れており、全体的に歪んで いる。	小石・砂粒 雲母含有。	色調は淡茶褐色。 45%、焼成良好。
4	挿図23-4 図版15-4	土師器・环	口 径 14.3 器 高 2.5	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、 内面部ナデ。	雲母含有。	色調は淡褐色。 45%、焼成良好。
5	挿図23-5 図版15-3	土師器・壺	口 径 18.6 底 径 5.6 器 高 25.5	口縁部横ナデ、胴部縱方向へラ削り、内 外面とも粘土巻きあげの痕跡残る。	石英・雲母 含有。	色調は茶褐色。 完形、焼成良好。
6	挿図23-6 図版15-5	土師器・壺	口 径 23.9	口縁部横ナデ、胴部縱方向へラ削り、外 面の器肌が荒れている。全体的に雑な作 りで重んでいる。	石英・雲母 含有。	色調は明赤褐色。 70%、焼成やや 不良。
7	挿図23-7 図版15-4	土師器・瓶?	口 径 22.2 底 径 6.2 底孔 径 5.6 器 高 31.5	口縁部横ナデ、胴部縱方向へラ削り、や や歪んでいる。	砂粒・雲母 含有。	色調は明赤褐色。 95%、焼成良好。
8	挿図23-8 図版15-5	土師器・高环	口 径 22.8 底 径 8.6 器 高 9.9	口縁部横ナデ、坏部上半横方向へラ削り、 下半縱方向へラ削り、内面横ナデ、脚部 縦方向へラ削り、脚部先端横ナデ。	小石・石英 雲母含有。	色調は淡茶褐色。 完形、焼成良好。
9	挿図23-9	土師器・壺	底 径 9.1	胴部へラ削り。	砂粒・石英 雲母含有。	色調は茶褐色。 35%、焼成良好。
10	挿図23-10 図版15-6	須恵器・小型壺	口 径 7.8 底 径 5.8 器 高 14.7	右回転ロクロ整形、底部及び胴部下半へ ラ削り、内・外面部に水引きの稜線が若干 残る。全体的に丁寧な作りで形が整う。	緻密。	色調は青灰色。 完形、焼成良好。

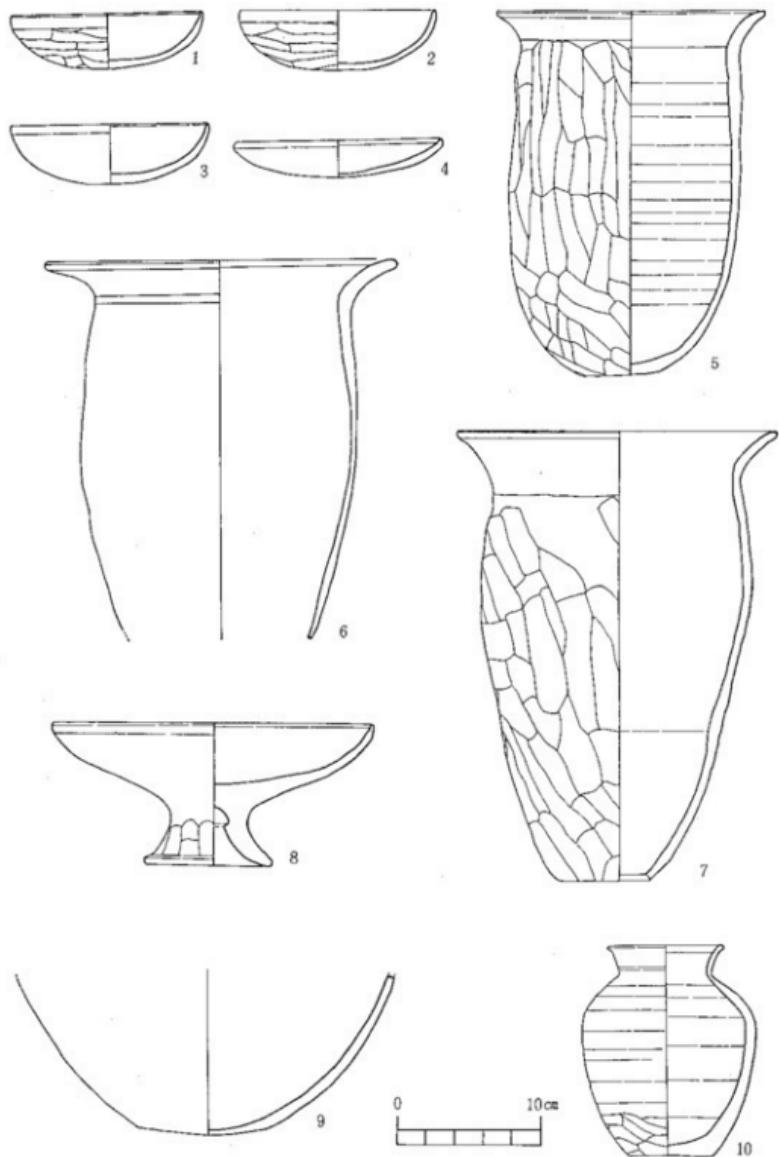


插图23 42号住居跡出土遺物実測図

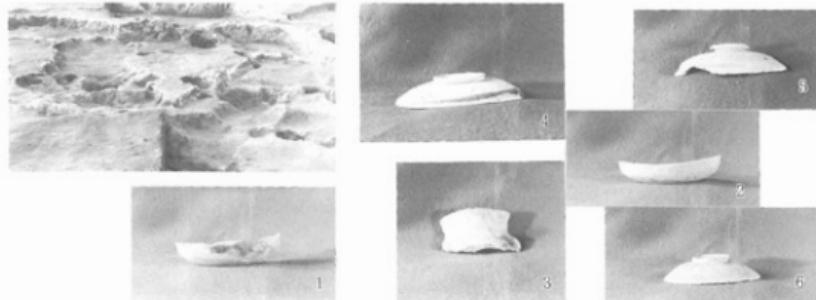
⑦ 25号住居跡



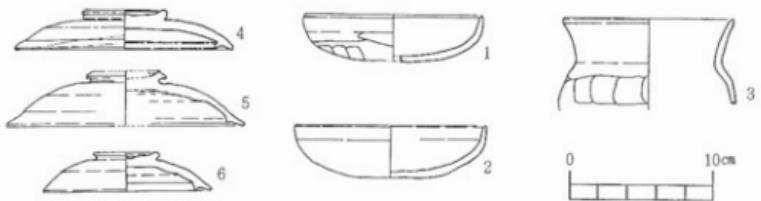
挿図24 25号住居跡

本住居跡は、発掘区中最も重複が認められた北東部付近中央に位置している。20号住居跡の南壁及び26号・30号住居跡を切って構築され、住居南壁及び東壁の一部を19号住居跡・堀1に切られている。プランは方形と推定されるが、詳細は不明である。壁はやや傾斜をもって掘り込まれている。床面はロームブロックを含む黒褐色土の貼床が約18cmの厚さでみられ、よく踏み固められているが、平坦でなく南半分がやや低くなっている。竈は北壁東寄りに敷設され、袖部・天井部とも暗褐色粘質土が使われ、住居外へ造り出されている。燃焼部・煙道部ともよく焼けている。

遺物は竈付近に多く、土師器の壺・甕片・須恵器の壺・蓋等が出土している。特に本住居は蓋が多くみられ、図示できなかったがもう2点、返りを持つ同様の蓋が出土している。



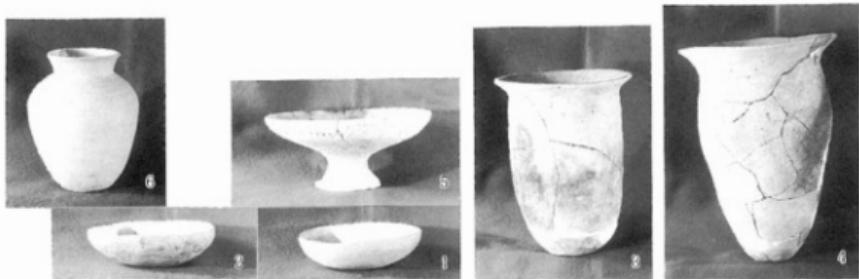
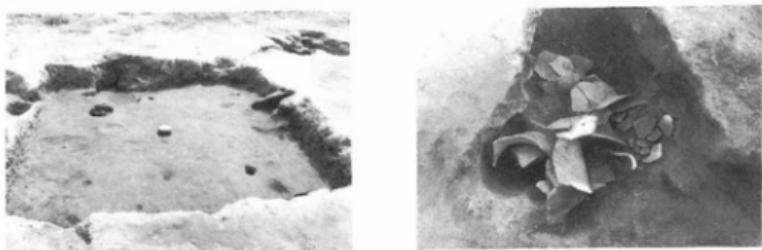
図版14 25号住居跡遺構全景及び出土遺物



插図25 25号住居跡出土遺物実測図

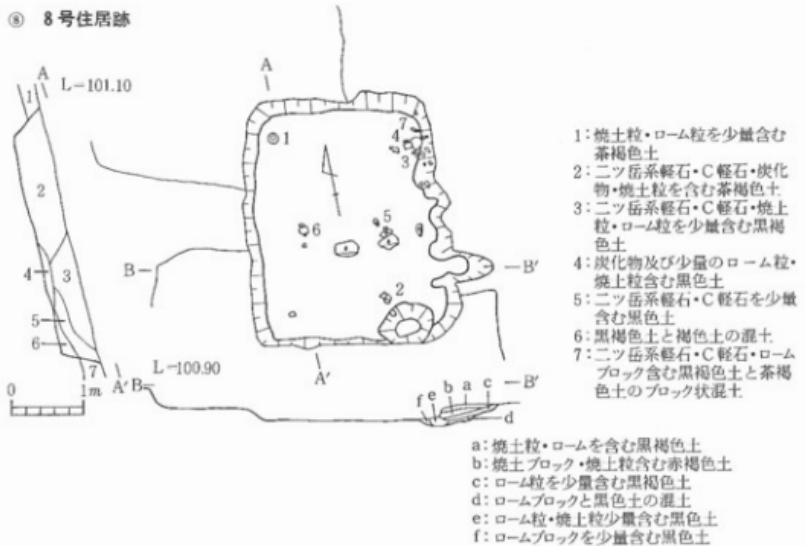
出土遺物一覧表

No	土器番号 図版	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	挿図25-1 図版14-1	土師器 ・壺	口径 12.2	口縁部横ナデ、底部は不定方向へラ削り、内面ナデ。	砂粒含有。	色調は赤褐色。口縁部・体部の一部にスス付着。45%、焼成良好。
2	挿図25-2 図版14-2	上師器 ・壺	口径 13.1 器高 3.7	口縁部横ナデ、底部は不定方向へラ削り、内面ナデ、底部内・外山の凹凸が流れる。	砂粒含有。	色調は赤褐色。30%、焼成良好。
3	挿図25-3 図版14-3	土師器 ・壺	口径 11.6	口縁部横ナデ、胴部上半横方向へラ削り。	石英・蜜母含有。	色調は赤褐色。30%、焼成良好。
4	挿図25-4 図版14-4	須恵器 ・蓋	口径 14.8 器高 2.8	右回転ロクロ整形、天井部は回転へラ削り後つまみ付す。内・外山ともロクロナナ、先端部自然點かから。	緻密。	色調は灰色。完形 焼成良好。
5	挿図25-5 図版14-5	須恵器 ・蓋	口径 16.2	右回転ロクロ形成、天井部は回転へラ削り後つまみ付す。内・外山とも整形須等の凹凸残る。	緻密。	色調は青灰色。45%、焼成良好。
6	挿図25-6 図版14-6	須恵器 ・蓋	口径 11.6 器高 2.8	右回転ロクロ整形、天井部回転へラ削り後つまみ付す。内・外山ともロクロナナ。	緻密。	色調は紫灰色。70%、焼成良好。



図版15 42号住居跡構造全景及び出土遺物

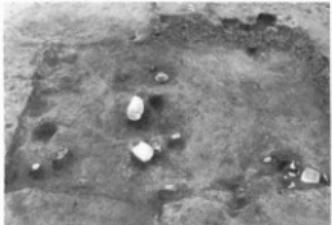
⑥ 8号住居跡



挿図26 8号住居跡

本住居跡は、発掘区北東部に位置し、7号・9号住居跡を切って構築されている。プランは南北に長い方形を呈している。床面は平坦であり、全体的に踏み固められている。竈は東壁南寄りに、住居外へつくり出されている痕跡はみられるが、1号溝により上部を破壊されており詳細は不明である。貯蔵穴は、住居南東隅にあり、72cm×50cmの楕円形を呈し、床面下15cmで、焼土粒・炭化物を含む黒褐色土で埋められている。その他柱穴と推定されるピット及び周溝は認められない。

遺物は、東壁下で上から流れ込んだ状態で出土している。又、No.6の壺(須恵器)は、口縁部を下に、床面に伏せた状態で出土しており、内部より焼土粒・炭化物を含む黒色土が検出された。その他、住居中央部に、全面よく焼けた安山岩が床上7cmの高さで2個出土しており、これは、竈に使用された石が、住居内に流れ込んだと推定される。



図版16 8号住居跡遺物出土状態及び出土遺物



挿図27 8号住居跡出土物実測図

出土遺物一覧表

No.	土器番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	挿図27-1 図版16-1	上師器・ 环	口 径 11.8 底 径 6.1 高 度 3.2	口縁部横ナデ、体部横方向へラ削り、底部不定方向へラ削り、内・外面部とも磨耗している。	若干の砂粒含有。	色調は茶褐色。完形、焼成普通。
2	挿図27-2 図版16-2	土師器・ 壺	口 径 17.6	口縁部横ナデ、特に口唇部は丁寧な横ナデ、脚部上半横方向へラ削り、コ字状口縁呈す。	砂粒・雲母含有。	色調は赤褐色。30%、焼成良好。
3	挿図27-3 図版16-3	土師器・ 壺	口 径 11.9	口縁部横ナデ、胴部上半横方向へラ削り、コ字状口縁呈す。	雲母含有。	色調は赤褐色。30%、焼成良好。
4	挿図27-4 図版16-3	土師器・ 壺	口 径 13.6	口縁部横ナデ、胴部上半横方向へラ削り、コ字状口縁呈す。	砂粒含有。	色調は淡褐色。35%、焼成良好。
5	挿図27-5 図版16-4	須恵器・ 环	口 径 12.6 底 径 6.8 高 度 4.0	右回転ロクロ整形、内・外面部ともロクロナデ、底部回転糸切り未調整。	雲母・石英含有。	色調は青灰色。完形、焼成良好。
6	挿図27-6 図版16-5	須恵器・ 高台付壺	口 径 15.6 高台径 7.9 高 度 6.0	右回転ロクロ整形、内・外面部ともロクロナデ、底部回転糸切り後高台付す。体部の部スヌ付着。	雲母・石英含有。	色調は灰色。完形、焼成良好。
7	挿図27-7 図版16-6	須恵器・ 高台付壺	高台径 12.2	底部回転糸切り後高台付す。丁寧な作りで高台部がしっかりしている。	雲母・石英含有。	色調は青灰色。高台部としては完形、焼成良好。



図版17 製鉄跡



発堀調査風景

◎ 積穴住居一覧表

住居番号	縦横(m) (東西)×(南北)	主軸方向	竈の位置	周溝の有無	柱穴の有無	貯藏穴	重複関係	備考	
1	4.21×2.50	N-5°-W	東壁中央	有	無	有	方形ピット←①	火災住居、住居内より多量の炭化物出土。	
2	3.10×? (南壁)	?	東壁か?	?	?	?	?	南壁のみ確認。他は調査区域外にかかる。	
3	4.48×4.20	N-42°-W	東南壁寄り	一部	無	有	3→4		
4	2.92×4.25	N-7°50'-W	東南壁寄り	一部	無	有			
5	3.36×3.60	N-3°50'-W	東壁	有	無	有	⑤→掘1	住居址南を掘1により切られる。竈内より支石出土。	
6	3.05×?	N-7°50'-W	北壁中央	無	無	無	6→7→8→W-1 9	7号住居に南壁を切られる。住居中央部にピット1基検出。窓前より焼石出土、冠材か?	
7	2.82×3.60(推定)	N-9°-W	?	?	?	?			8号住居に東壁の一部及び南壁を切られる。
8	2.40×3.16	N-11°-E	東南壁寄り櫛	無	無	有			W-1に竈を切られる。
9	4.80×2.86	N-10°-E	東南壁寄り	一部	無	有			8号住居に北壁を切られる。
10	3.40×4.00	N-29°30'-W	東南壁寄り	無	無	有	16→11→10→19	竈は白色粘土で構築。貼床がみられる。	
11	3.39×4.60(推定)	N-12°-E	?	?	?	?			10号住居により大部分切られしており、詳細不明。
12	4.10×3.8	N	東南壁寄り	無	無	無			掘り込み浅く南壁不明瞭。北壁の一部を14号住居に切られる。竈は白色粘土構築。
13	4.50×4.86	N-8°30'-E	東壁	一部	有	有	⑬→掘2	南壁下に周溝確認。柱穴は住居内に4基検出。竈は東壁に2基構築。	
14	?	?	?	?	?	?	12→⑭→掘3	東南コーナーのみ確認。他は調査区域外にかかる。	
15	3.56×5.24	N-8°-E	東南壁寄り	無	無	有	17→⑮	竈内より支石出土。床面軟弱。	
16	2.78×4.70	N-16°-E	東壁か? 櫛	?	?	?	⑯→11→10	ピット2基確認。	
17	3.52×4.54	N-27°-E	東南壁寄り	有	無	有	17→⑮	竈は袖石及び白色粘土で構築。	
18	2.88×3.8	N-18°30'-E	東南壁寄り	無	無	有	⑯→9号塙	貼り床(ロームブロック含む暗褐色土)がみられる。床面軟弱。	
19	3.32×3.76	N-8°30'-E	東壁	無	無	有	25→10→⑯→掘1	住居内にピット3基あり。床面軟弱。	
20	3.82×3.8	N-31°30'-W	西南壁寄り	無	無	有	㉚→25	竈は両袖に長甕使用。支脚(羽口)出土。遺物完形品が多い。	
21	4.68×5.35	N-17°30'-W	東南壁寄り	無	有	有	㉑→掘2	柱穴は4基検出。正方形の配列示す。	
22	4.79×4.48	N-36°30'-W		無	無	無	㉒→掘2号塙	竈はなし。	
23	2.46×3.42	N-8°30'-E	東南壁寄り	無	無	無		竈は電柱にかかるため完掘できなかったが、石組み竈と推定。	
24	3.84×3.86	N-31°30'-W	西南壁寄り	無	無	有		竈は袖部に長甕・甕・使用、竈内部より支石出土。床面軟弱。	

住居番号	規模 (m) (東西) × (南北)	主軸方向	竈の位置	周溝の有無	柱穴の有無	貯蔵穴	重複関係	備考
25	4.68× ? (北壁)	N-26°-W	北東 壁り	?	?	?	20 → 10 ↓ 30→26→25→19 ↓ 堀 1	重複激しい。19号住居・堀 1 に南壁及び東壁の一部を切られる。
26	? × 3.28 (西壁)	N-4°30'-E	?	有?	?	?		重複激しく詳細不明。
27	? × 4.36 (東壁)	N-9°-E	東南 壁り	?	?	有	35→28→29→27 ↓ 36 ↓ 堀 3	堀 3 によって住居西半分を切られる。竈は28・29住居の埋土上に構築される。冠材使用。
28	3.66× (推定)	N-25°-W	東 壁	無	有	有		柱穴は住居内に 4 基検出。正方形の配列を示す。
29	2.52× (推定)	N-13°50'-W	東 壁	無	無	有		火災住居、住居内より多量の炭化物出土。
30	? × 4.10 (西壁)	N-8°-E	?	?	?	?		重複激しく詳細不明。
31	3.40×4.02	N-7°30'-W	東南 壁り	無	無	有	31→30→26 ↓ 32→33	30号住居によって北東コーナー付近を切られる。竈付近擾乱をうける。
32	3.28×4.00	N-12°50'-E	東南 壁り	無	無	有		住居内南半分にピット 5 基検出。床面軟弱。
33	2.96×3.34	N-17°30'-W	東南 壁り	無	無	有		掘り込み浅く壁不明瞭。
34	? × 4.46 (東壁)	N-11°30'-E	東南 壁り	?	無	有	32→33→34 ↓ 堀 3	掘り込み浅く南壁不明瞭。堀 3 により西半分は切られる。竈は石(凝灰岩)組みしたと推定。
35	?	N-39°-W	?	?	?	?	45→28→29→27	南壁の一部分確認、詳細不明。
36	? × 3.34 (東壁)	N-15°-E	東南 壁り	?	無	有	35→27→36 ↓ 堀 3	堀 3 により西半分は切られる。竈は袖石使用、支石痕残る。
37	? × 3.52 (東壁)	N-14°30'-W	東南 壁り	無	無	有	37→堀 3	堀 3 により西半分は切られる。住居内に大ピット 1 基検出。
38	2.74×3.30	N-15°-W	東南寄り牆	有	無	無	46→38→堀 3	堀 3 に竈切られる。東南コーナーより焼土(安山岩) 1 コ出土
39	4.62×3.06	N-12°30'-W	東南 壁り	無	無	有	46→39 ↓ 44	竈は白色粘土で構築。貼床がみられる。
40	2.70×3.32	N-4°30'-W	東南 壁り	無	無	有		竈は袖石(安山岩)使用。床面や軟弱。
41	2.70×3.24	?	西南 壁り	無	無	有	41→5号塗 ↓ 42 ↓ 45	貯蔵穴より甕(完形)出土。 竈は白色粘土で構築。内より甕片多量に出土。ピット 1 基検出。
42	4.36×5.06	N-32°-W	西南 壁り	無	無	無		掘り込み浅く壁は不明瞭。床面や軟弱。
43	4.02×3.20	N-13°30'-E	東南 寄り	無	無	無	70→43	39号住居によって東壁が切られる。北東コーナーにピット 1 基確認。竈内より支脚(羽口)出土。
44	3.08×3.55	N-7°30'-W	西南 壁り	無	無	無	44→39	39号住居によって東壁が切られる。北東コーナーにピット 1 基確認。竈内より支脚(羽口)出土。
45	2.58×3.70	N-11°30'-E	東南 壁り	無	無	無	42→45	竈内より甕(土師器)出土。

住居番号	規 模 (m) (東西)×(南北)	主 軸 方 向	竈の位置	周溝の有無	柱穴の有無	計 窓穴	重複関係	備 考
46	?	?	?	?	?	?	46→39 46→38	北東コーナーを確認。詳細不明。
47	2.40×2.42	N	炉・住居中央 偏	無	無	無	48→47	掘り込み浅く、南壁不明瞭。
48	3.58×3.00	N-50°-E	炉・東南 隅 偏	無	無	無		掘り込み浅く、南壁不明瞭。
49	3.36×3.92	N-23°-W	東 南 寄 り	無	無	有		竈は袖石(安山岩)及び白色粘土で構築。床面や軟弱。
50	4.98×5.00	N-30°-W	炉 跡・住居 西半分中央	有	無	無		弥生住居、埋土にC軽石、純層。
51	3.91×4.67	N-23°30'-W	?	無	無	無		弥生住居、埋土にC軽石純層。 ピットは住居内に3基、住居外に1基検出。
52	3.91×4.51	N-14°-E	東 南 壁 寄 り	無	無	有	52→W-2	
53	2.60×3.96	N-19°-E	東 南 壁 寄 り	無	無	有	53→製鉄址	床面軟弱。北半分を製鉄址に切られる。
54	3.44×3.64	N	東 南 壁 寄 り	無	無	有	54→製鉄址	床面軟弱。ピットは住居内に2基検出。
55	5.80×6.74	N-40°-W	炉?	一部	有	無		弥生住居、埋土にC軽石純層あり。火災住居。
56	?	N-5°30'-W	東 壁	?	?	有	56→W-2	住居北半分は調査区域外にかかる竈は袖石及び冠材(各安山岩)使用。内より支脚(羽口)出土。
57	4.80×4.18	N-13°-W	東壁中央	一部	有	有		竈は白色粘土で構築。
58	3.14×3.98	N-15°-E	東 南 壁 寄 り	無	無	有		竈内より多量の土師罐片出土。
59	3.70×2.90	N-41°30'-W	東 南 壁 寄 り	無	無	有	59→配石	住居跡上に配石遺構が構築される。
60	2.70×4.40	N-15°-W	東 南 壁 寄 り	一部	無	有	60→カンボリ	竈は袖石使用。竈内より支石出土。
61	2.90×3.52	N-9°-E	東 南 壁 寄 り	無	無	有		掘り込み浅く壁は不明瞭。ピットは住居内に1基検出。
62	2.30×2.60	N-15°-E	東 南 壁 寄 り	無	無	有		耕作により擾乱をうける。
63	3.00×2.80	N-38°-W	東壁中央	無	無	有		竈煙道部よりあまり焼けていない石(安山岩)出土。住居南壁下より子持勾玉出土。
64	5.10×5.34	N-29°30'-W	東 南 壁 寄 り	有	有	有	54→8号塙 集 石	住居跡上に集石遺構が構築される。竈は白色粘土で構築。
65	4.10×4.46	N-11°30'-W	東 南 壁 寄 り	無	無	有		竈は右側石痕あり。ピットは住居内に1基検出。
66	4.36×5.00	N-9°-W	東 南 壁 偏 偏	有	無	有	54→67	住居東半分上に67号住居床面が構築される。ピットは住居内に2基検出。
67	3.20×4.61	N-10°30'-E	東 南 壁 寄 り	有	無	有	66→67→9号塙	9号塙が住居北東コーナーを切る。貼り床。
68	3.40×4.50	N-23°-W	東 南 壁 寄 り	有	無	有		住居南半分レペル差4cm~6cmの階段上施設あり。床面5段となり各々堅壁。
69	4.30×4.30	N-36°-W	東 南 壁 寄 り	無	無	有		竈及び住居南東コーナー付近擾乱をうける。
70	?	?	東 南 壁 寄 り	?	?	?	70→43	43号住居により大部分が切られる。詳細不明。

① 住居の主軸方向は南北線を基準とした。
 ② 規模は壁の下場を測り、歪みのあるものは平均的数値を記した。
 ③ 床面は軟弱と記したもの以外は堅緻である。

(3) まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代から平安時代に及ぶ竪穴住居跡を70軒検出した。各時期の主な住居跡、また、特色のある住居跡については前述したが、ここではその他の住居跡を含めてこれらをまとめてみたい。

弥生時代に属する3軒の住居跡は、発掘区北西部に位置し、埋土中に4世紀中頃、浅間山から降下したC軽石の1次堆積がみられた。^(注1)そのプランは方形で、掘り込みが深く、壁・床ともしっかりしている大規模な竪穴住居跡である。柱穴及び炉を比定したのは50号住居のみで、51号住居は柱穴・炉とも不明瞭であった。

遺物は、樽式土器の範疇に入る壺・壺・高坏等が出土している。壺・壺の形態及び頸部に3~4連止屢状文が、50号住居出土の壺には折り返し口縁部に波状文がみられる等の整形技法からも弥生時代後期後半に比定できよう。^(注2)なお、折り返し口縁部に波状文がみられる土器は、50号住居のみ出土している事、C軽石純層の堆積状況等を考えあわせると、51号→55号→50号の順で後出すると思われる。又、55号住居からは特殊器台形土器が出土しているが、これは「土師時代前期を中心^(注3)認められており、古いと考えられるものでも弥生時代後期をさかのばらない」ということであるから矛盾していないと思われる。

次に古墳時代の住居跡であるが、8軒（2軒）検出され、57号・60号・63号住居を含む6軒が発掘区南西部に位置している。これらは方形プランを呈し、掘り込みが深く、床壁ともしっかりしている。壺は東壁中央から南寄りに敷設され、素材は白色粘土を主体とするもの、石を置いて粘質土で補強するものがある。柱穴は57号・64号で検出されたがいずれも長方形の配列を示している。貯蔵穴と推定されるピットは壺右側にあり、直径は小さいが、床面下に深く掘り込まれている。出土遺物は土師器が主で、壺・長壺・瓶・壺・高坏等がみられ、完形品も多く保存状態も非常に良好であった。又、須恵器高坏、滑石製子持勾玉も出土している。

これに対し、20号・24号住居は発掘区北東部に位置し、規模・走向・住居内施設の状況出土遺物等非常に類似しており、ほとんど同時期に作られた住居跡と推定される。

これら8軒の住居跡の時期は、壺及び長壺の整形技法及び形態等から多少各住居間に時間的ズレ^(注4)はあるが、6世紀後半から7世紀代に比定できよう。

なお、47・48号住居は掘り込みが浅く、搅乱を受けているため規模等不明瞭であるが、壺はなく炉と推定できる痕跡が残る事、古式土師器と思われる遺物が破片であるが床面より出土している事等から、前述の8軒より先行すると思われるが、明確には規定しえなかった。

本発掘区中最も多く検出されたのは、奈良・平安時代の住居跡で57軒であった。この時代の住居は発掘区全域に広がるが、特に北東部に集中する傾向がみられ、相互内での重複が顕著である。これらは全般的に掘り込みが浅く、南北を長壁とする小規模なものが多い。床はローム床と貼床がみられるが、よく踏み固められている。壺は東壁南寄りに敷設されているものが多いが、まれに北壁・南壁にみられる。素材は白色粘土を主体としたもの、石組みしたもの、土器及び石で補強してあるものと様々であるが、後出する住居は石を使用する傾向にある。柱穴の検出される住居はみられない。貯蔵穴と推定されるピットは、ほとんどの住居でみられ、古墳時代の貯蔵穴に比してさらに小

径となり、掘り込みも浅い。

出土遺物は、土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・塗・甕があり、量の多少はあるがほとんどの住居で土師器とともに須恵器を出土する。この他鉄製品・羽口・土製紡錘車も出土している。これらの住居の時期は、奈良時代から平安時代にまで及び、連続して並べることができる。しかしこの字状口縁を持つ土師器甕は出土するが、羽釜・土釜の出土はみられない事、灰釉陶器は36号住居埋土中に
（注5）
破片で出土している他はまったくみられない事等から下限は10世紀代頃と考えられよう。

以上、各時代毎に概観したが、年代については遺構・遺物のさらなる検討が必要と思われる。また、本発掘区内において竪穴住居は、弥生時代後期から古墳時代後期まで時間的な隔たりがあり、
（注6）
これも1つの問題点となる。なお、住居跡の分布をみると各時期でまとまった範囲があり、弥生時代の住居跡は発掘区外北西部に、古墳時代の住居跡は発掘区外南西部へ、奈良・平安時代の住居跡は北東部へ各々さらに住居群が存在する可能性があると思われる。

（注1）C軸石堆積状態については前述の51号・55号・50号住居跡を参照

（注2）平野進一氏 1980 「北関東西部における後期梯彫文土器について」

（注3）熊野正也氏 1980 「特殊な器台形土器について」（3）『史館』第12号

（注4）古墳時代の土師器については、遺物整理中に井上唯雄氏の御教示を得た。

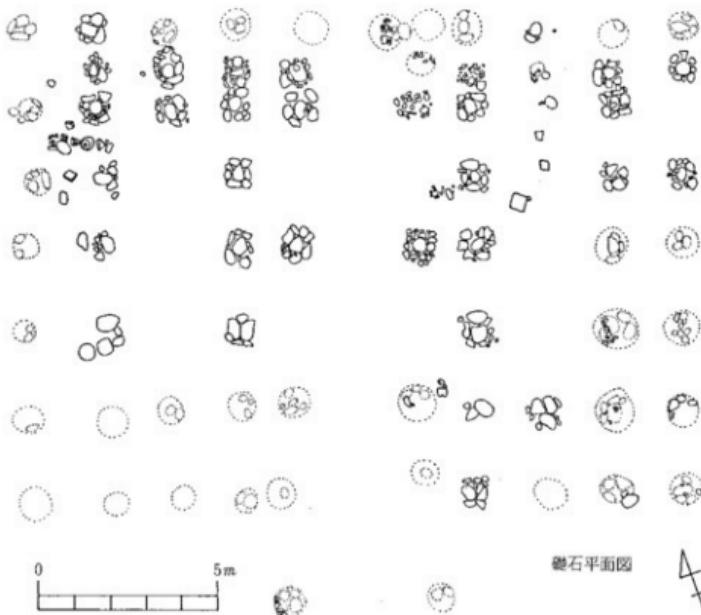
（注5）井上唯雄氏 1978 「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』第8号と群馬県教育委員会1979

『上野国分寺隣接地域発掘調査報告—奈良平安時代の竪穴住居跡等の調査』を参考にさせていただいた。

（注6）前述のごとく47・48号住居は古式土器片を出土しており、表採設階でもこれらの散布がみられ古墳時代後期以前の遺構も想定できよう。

2 寺院跡・居館跡・その他

(1) 寺院跡



挿図28 寺院跡礎石群

寺院跡と考えられるものが、上図の礎石群である。地籍図等による正法院本堂の位置と、ほぼ一致するため、正法院の本堂跡と考えられる。

礎石には、耕作等で、すでに動いているものもあったが、固められた土層に石が組まれていたため跡が穴となっており、位置・範囲を確定することができた。

礎石群によると、本堂は、東西9間、南北6間となる。内陣の部分は、3間を4分し、1対2対1の割合で柱をたて中央をあけている。礎石間の距離は、200cm前後であるが、礎石群の東西列の間隔が、北から5列目より南の列では広がっており、220~240cm前後になっている。特に5~6列目は240cmと広く、内陣・外陣を分けているように思われる。礎石の東西の距離は200cm前後で、1間180cmとすると、柱の太さは約40~80cmと推定される。礎石部は、中心に礎石を据え、その周囲に転石を方形を意図して配列している。礎石部の範囲は、80cm×80~100cmほどが多い。

礎石東西列の北から2列目は、1列目・3列目の中間であるが、並びの方向にわずかなずれがあり、かつ、礎石の切り合いがあり、1・3列目より古いで、2列目を除く礎石群による本堂より以前の本堂の礎石とも推定されるが、他に違いはなく明らかでない。東西列3列目東端は礎石が欠損しているが明らかでない。南の2つの礎石は、本堂入口の礎石と考えられる。



図版18 磐石群全景



磐石

(2) 配石遺構

磐石群の南東に配石遺構が検出された。59号住居跡と重複をしており、59号住居より新しい。大小の石を巾約80cm、深さは約40cmほどに積み上げたもので、その範囲は東西辺約730cm、南北辺約470cmの長方形を呈する。下部は川原石で詰め、上部は土と小石を層状に敷きつめている。住居跡と重なる部分は、さらに住居跡の床まで約15cm掘り下げ、ロームまじりの黒色土が埋めてある。

建築物の基礎と考えると、寺の磐石と比較しても、かなり重量のあるものの基礎と考えられる。

寺と関係があり、鐘楼跡ではないかとも推定されるが明らかではない。

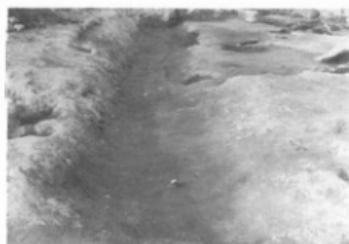


図版19 配石遺構と59号住居跡全景

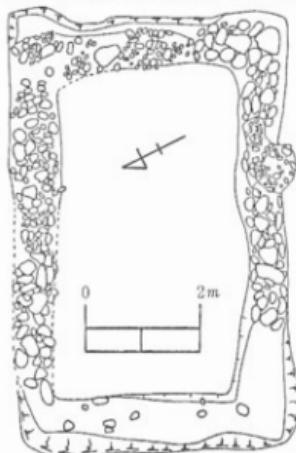
図版20



居館跡内壁（北より）



正法院東壁（南より）



図版21 配石遺構平面図 配石遺構平面図

(3) 環濠跡・その他(挿図2・遺構全体図参照)

堀は4条検出されている。うち1条は、調査区の中央を通っており、36頁の地籍図の正法院の敷地の東の線と一致をするので、正法院の東を区画する堀と考えられる。

のこり3条は環濠跡の濠と考えられる。検出された濠は、北西のコーナー部とその延長であるが、1条は外濠と考えられる。外は、現状で、巾3~4.6m、深さ1.3~1.5mである。他2条は内濠と考えられ、1条は、巾1.4~1.8mで深さ50~90cm、1条は、巾70~90cmで、深さ40cmである。内濠と考えられる濠の底には、長さ50cm、巾40cmの工具使用の跡と考えられる削り込みが残っていた。

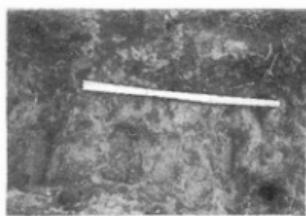
外濠の一辺は、現状で約80m、内濠は南端が不明であるが、北側と同じ巾で東に曲っているとすると、一辺は約60mとなる。内濠の内側のものは、その延長を確かめられなかった。

濠は、いずれも住居跡を切っており、内濠内からは、多数の鉄クギ、炭化物、古銭が集まって出土しており、濠の断面には、炭化物を多く含む層があった。

環濠内部の建物跡については、ほとんどが平夷されており、不明であった。濠も、人家等のため、全域は調査しえなかった。

その他の遺構としては、溝が2・土塙9、集石がある。溝は、一部のみの検出で、性格は不明である。土塙も出土遺物ではなく、性格は不明であるが、地下式土塙と考えられるものもある。集石は耕作により集められたものであるが、調査区出土と思われる五輪塔残片を含んでいた。

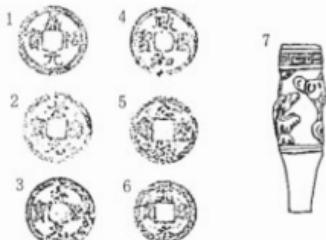
製鉄跡は壊されていて、鉄滓のついた石が散乱しているのみであった。



図版21 居館跡内掘の工具痕



図版22 9号土塙



挿図30 古銭拓影及びキセル吸い口

出土古銭一覧表

No.	名 称	初 鋸 年 代	出 土 地 点
1	嘉祐元寶	宗仁宗 1056	62号住居跡 と63号住居跡の中間の 表上中(守 表関係?)
2	景德元寶	宗真宗 1004	
3	□□元寶	不 明	
4	政和通寶	宗徽宗 1111	
5	元祐通寶	宗神宗 1068	
6	寛永通寶	1636	環濠跡
7	キセルの吸い口	江戸時代(推定)	55号住表土中

(3) まとめ

以上の調査により、正法院の寺域は、調査区中央の堀より西の道路までの方形の範囲と考えられる。

しかし、橋の伝承、南の「女堀」まで広がる所有地など、さらに広かった可能性がある。正法院が建てられた年代については、明らかにするものはないが、寺城を堀が

めぐっている点、本堂の内陣・外陣がやや異なって作られている点、環濠跡が慶長年間に作られた時には寺はすでに存在していたという伝承などから、江戸時代以前にさかのぼりうる可能性もある。寺域内より出土している五輪塔残片は、室町～戦国時代と推定される。

環濠跡は、調査区東に隣接する塩沢（当時は中里）家の伝承によれば、慶長年間に、中里家が、二之宮より、ここに移され、作ったものとある。の中里家の長兄は酒井氏に従い姫路に、次兄が地元に残ったと伝えられている。火災で2度焼失との伝承もあり、1度は、正法院の火災に類焼と伝えられる。範囲は、南は「カンボリ」東はすぐ東の道までと推定される。

調査区の南を東西に走る「カンボリ」は、荒砥川よりの用水路として使用されていたもので、現在は埋められているが、底は、現地表より約2m下である。「カンボリ」には正法院の朱塗りの橋があつたとの伝承ものこっており、名前の由来は不明であるが、「神掘」ととも、観音川を経由して水を引いたことから「観掘」であるとも言われている。

III むすび

55年度の調査では、以下のことが確かめられた。

1. 弥生時代の住居跡3軒を検出した。3軒とも、4世紀中ごろの浅間山噴火の際に降下したC軽石がレンズ状に堆積していた。50号住居跡では住居中央でC軽石層が床に接していた。
 2. 古墳・奈良・平安時代の住居跡67軒を検出した。古墳・奈良時代の住居跡に保存状態の良いものが多く、24・60号住居跡などは、長甕・楕円甕等多数の土器が、使用中の状態で出土しており、一括遺物として、当時の人々の生活を知るうえで、貴重な資料である。
 3. 磐石群は、正法院の本堂跡のものである。
 4. 瓦礫跡は、塙沢（当時は中里）家のもので、作られたのは慶長年間と伝えられている。二重の塙をもつことが確認された。



插圖31 檢查區拍攝圖

富田遺跡群(55年度)

印刷 昭和56年3月25日

発行 昭和56年3月31日

発行所 前橋市大手町二丁目11番1号
前橋市教育委員会

印刷所 前橋市大手町三丁目6番11号
有限公司原田印刷所

